福岡市埋蔵文化財年報

VOL. 27

－平成24（2012）年度版－

2013

福岡市教育委員会

序

福岡市では、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存と活用を図ることを目的として、公共及び民間の各種開発事業の事前審査、記録保存のための緊急調査、また重要遺跡確認調査等を実施しております。

文化財部は平成24年度をもって、組織改編により教育委員会から、新設された市長部局の経済観光文化局へと移行し、教育委員会の補助執行として、文化財活用を含めた多岐にわたる文化財保護業務に取り組むこととなりました。

本書は、平成24年度における埋蔵文化財保護行政の概要を報告するものです。開発事業に起因する緊急調査件数は、平成13年度から平成16年度をピークに増加に転じましたが、平成17年以降減少をつづけ、24年度はピーク時の半数までに減っています。一方、事前審査件数は逆に平成19年から年平均7%増加に転じ、6年前に比べ740件程も増加する、相反する動きをしめしています。発掘調査一件あたりの規模は、民間、公共を問わず小規模化しており、景気を反映し、小規模開発の増加傾向が続いている様ですが、今後とも埋蔵文化財保護業務について適正で迅速な対応を進めたいと思います。

本書が文化財保護に対するご理解の一助となり、また学術資料として活用いただければ幸いです。

平成25年12月27日

福岡市教育委員会
教育長　酒井　龍彦

例言

・本書は、埋蔵文化財審査課、埋蔵文化財調査課、文化財保護課、大規模史跡整備推進課が平成24年度に実施した各種開発事業に伴う事前審査と発掘調査の概要及び本報告、ならびに新指定文化財の概要について収録したものである。
・本書に記載ある24年度調査のうち、調査番号1208，1213，1231，1233，1234は、この年報をもって本報告とする。その他、本年度別途、本報告書が刊行されている調査については調査概要は割愛している。
・Vの各調査の概要及び調査報告は各調査担当者が分担執筆した。Ⅵについては文化財保護課（水野哲雄）が執筆した。
・上記以外の執筆並びに本書の編集は加藤良彦が担当した。

表紙写真：徳永B遺跡第4次調査　徳永古墳群Ⅰ群3号墳と現地説明会風景

目　次

Ⅰ　平成24年度文化財部の組織と分掌事務　2
Ⅱ　開発事前審査　3
Ⅲ　発掘調査　6
Ⅳ　公開活動　6
Ⅴ　平成24年度発掘調査概要および報告　8
Ⅵ　平成24年度新指定文化財　75
報告書抄録　82

Ⅰ　平成24年度文化財部の組織と分掌事務

文化財部　**文化財部の組織と分掌事務**

51

文化財保護課　10

運用係（事3、文1）　部の総括、文化財施設の管理

整備活用係（事1、文2）　史跡の保存・整備・活用、文化財関係団体との連絡調整

文化財調査普及係（文1、学1）文化財保護審議会、文化財の調査、普及事業

大規模史跡整備推進課　5

福岡城跡整備係（事1、文2）　福岡城跡の調査・整備、課の庶務

鴻臚館跡整備係（文1）　鴻臚館跡の調査・整備

埋蔵文化財審査課　9

事前審査係（文4）　公共及び民間開発事業に係る事前審査

主任文化財主事（文1）

管理係（事3）　課の庶務・第1・2課の予算・決算

埋蔵文化財調査課　20

調査第1係（文5）課の庶務・東部地区の埋蔵文化財の発掘調査及び保存

主任文化財主事（文4）

調査第2係（文6）国庫補助事業総括・西部地区に係る埋蔵文化財の発掘調査及び保存

主任文化財主事（文3）

主査（文1）　今宿古墳群保存担当

埋蔵文化財センター　7

運営係（文3事2）　施設の管理運営、考古学的資料の収集・保存・展示

主任文化財主事（文1）

事：事務職　文：文化財専門職　学：文化学芸職

埋蔵文化財審査課，調査課の職員構成（審査課管理係は事務職。他は文化財専門職）

◇埋蔵文化財審査課長　来倉秀紀

管理係長　和田安之

係員　古賀とも子　川村啓子

事前審査係長　加藤良彦

係員（文化財主事）　森本幹彦　松尾奈緒子　今井隆博

主任文化財主事　佐藤一郎

◇埋蔵文化財調査課長　宮井善朗

調査第1係長　常松幹雄

係員（文化財主事）　久住猛雄　阿部泰之　比嘉えりか　大森真衣子

主任文化財主事　小林義彦　吉留秀敏　屋山洋　大塚紀宣

調査第2係長　菅波正人

係員（文化財主事）　讃本正志　井上繭子　福薗美由紀　清金良太　松村道博

主任文化財主事　荒牧宏行　榎本義嗣　加藤隆也

主査（今宿古墳群担当）　杉山富雄

Ⅱ　開発事前審査

1．概　要

本市では、土木工事等の各種開発事業に係る埋蔵文化財の取り扱いについて、開発事業計画地における埋蔵文化財の有無を確認した上で、保存に係わる協議等を行っている。

公共事業については、関係機関・部局に次年度の事業計画の照会を行い、埋蔵文化財の保存上問題になると判断される事業については取り扱いについて協議を行っている。

民間の開発事業については、都市計画法に基づく 1,000 ㎡以上の開発事業、建築基準法に基づく建築事業等を対象として事前協議を求めている。また建築等の計画策定段階での照会にも窓口やファックスで応じ、埋蔵文化財の保存上の措置について必要な指示を行っている。8 月よりは本市ホームページにて、包蔵地外町丁名リストの公開を開始し、利用者の照会の便宜を図っている。

2．平成 24 年度の事前審査

平成 24 年度の事前審査件数は、表 1 のとおりである。平成 19 年からの増加傾向で、6 年間で 740 件弱・39%も増加している。22 年からは高止まり状態で、東日本大震災の影響と思われるが、減少には至っていない。

申請内容

公共事業に伴う依頼 184 件は微減。内訳は表 3 のとおり。事業者別では、国機関 16 件(9%)、福岡県 7 件(4%)、福岡市 145 件（79%)、その他 13 件（7%)、 九州旅客鉄道 3 件＊で、福岡市各部局事業が 38 件の 21%減少、公共事業の低迷化を示している。国機関は福岡空港整備事業を控えて国交省 11 件を含め 14 件の増加をみている。事業別では水道・電気等 74 件（40%)、道路 34 件（19%)、学校関係 9 件（5%)、公園 13 件（7%)、空港関係 8（4%)、住宅を含めた建物 27 件（15%)、そのほかの開発が 18 件（10%）で、道路事業が 15 件 31%と大きく減少し、留守家庭子ども会施設・公民館改築で建物が倍増し、空港関係が 1 件から 8 件へと急増している。このうち公有財産の売却等の土地調査にかかる事前審査依頼は 11 件（6%）であった。事業照会件数は 1,181 件で、昨年度と同数であった。事業別内訳は上下水道 844 件（72%)、73 件約 10%の増加で、汚水桝の工事増を反映している。道路は 135 件（11%）で 83 件 38%の大幅減で道路事業全体の縮減を示している。住宅を含めた建物 42 件（4%）も 33 件減で同様である。学校 94 件（8%）は 41 件の急増で、学校の一斉改築建替えの時期と重なっている。公園 41 件（4%）も 16 件増加、空港は 4 件（0.3%）であった。

民間事業 1,261 件の届出内容は、届出者別に見ると個人 392 件（31%)、65 件 14%の大幅減で昨年以来専用住宅の買い控えが進んでいる。反面一般企業は 542 件（43%）の 146 件 37%の大幅増となっている。個人事業者は 258 件（21%)、学校法人・医療法人等の民間事業者 48 件（4%）で微減となっており、投資的な要素が増加している。事業別では個人住宅 355 件（28%)、戸建住宅 278 件（22%)、共同住宅 163 件（13%)、宅地造成 22 件（2%）など住宅関連事業をあわせると 820 件全体の 65%で前年から 9%も減少しており、個人専用は 157 件減で昨年から 31%もの減少である。住宅以外の事業としてはその他の建物（事務所、診療所、福祉施設、倉庫等）116 件（9%)、土地売買に伴う審査依頼は 67 件（5%）で微減。看板・アンテナ等のその他の開発 66 件（5%）で 22 件の増、携帯基地局の増加が目立つ。店舗は 49 件（4%）で 14 件 40%増となっており同様に投資的要素が増加している。区画整理計画地の事前の調査依頼は 9 件である。

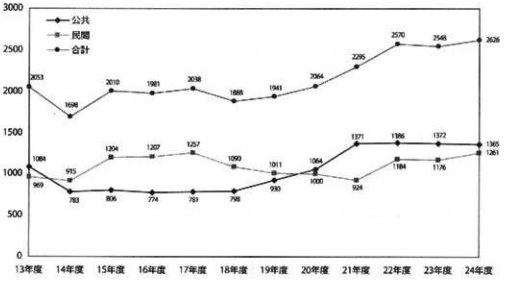
区別では博多区 295 件(20%)、西区 286 件(20%)、城南区 251 件(17%)と前年順位が大きく変わっている。南区で 55 件 22%増、東区で 44 件 28%増、一方前年に続き西区 31 件 14%減が目立つ。

＊　政令で定める国の機関等（法 94 条対応）に該当。

表1　平成13～24年度事前審査件数推移

事業	内　訳	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
公共	事業照会審査件数	1,084	783	671	662	668	665	769	862	1143	1191	1181	1181
	申請件数			135	112	113	133	161	202	228	195	191	184
	審査件数計	1,084	783	806	774	781	798	930	1,064	1,371	1,386	1,372	1,365
民間	窓口照会件数	4,540	4,662	4,292	5,842	6,126	8,309	7,226	6144	5555	6225	6791	7195
	FAX 照会件数			524	1,499	2,296	3,354	3,990	3537	3729	4584	5716	7170
	照会件数計	4,540	4,662	4,816	7,341	8,422	11,663	11,216	9,681	9,284	10,809	12,507	14,365
	申請（審査）件数	969	915	1,204	1,207	1,257	1,090	1,011	1000	924	1184	1176	1261
公・民審査件数計		2,053	1,698	2,010	1,981	2,038	1,888	1,941	2,064	2,295	2,570	2,548	2,626

表2　事前審査件数推移表



指導内容

公共、民間各事業の事前審査の結果、事業者に指導した内容は表3のとおりである。次年度継続、取り下げを除くと審査件数は1,561件で、前年より106件増。総括的に見ると書類審査での回答1,167件（75%）、以下踏査15件（1%）、試掘379件（23%）で、いずれも増加している。審査結果は開発同意213件（14%）、慎重工事1,053件（67%）、工事立会232件（15%）、発掘調査37件（2%）、要協議（設計未定、売却予定で遺跡ありなど）26件で、立会が54件増加している。

試掘調査・確認調査

包蔵地内で行われる確認調査、包蔵地外で行われる試掘調査（以下試掘調査と総称する）は東区42、博多区86、中央区8、南区71、城南区44、早良区74、西区54件、総計379件で、遺跡は135遺跡である。10件以上試掘した遺跡としては有田遺跡群12件、那珂遺跡群11件、原遺跡11件、博多遺跡群は5件で昨年から大きな変化はない。隣接地に当たる遺跡は64遺跡であった。

試掘件数は昨年度に比べ微増であったが、東区と南区で二桁の増加の反面、博多区は26件30%の大幅減で、昨年からの都心部での開発の低調が続き、同様に周辺部での個人住宅、個人事業の増加傾向が続いていることを示している。

表3　平成24年度事前審査内訳

区名	事業	審査種別（書類審査・現地確査・試掘調査）でみた判断指示の結果																	区別審査件数		掘会件数
		開発同意			慣習工事			工事立会			発掘調査			協議			審査取り下げ		公民別計	区計	(*)
		書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	継続				
東	公共	0	0	5	5	0	2	4	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	18	160	242
	民間	35	1	13	53	1	14	13	0	3	1	0	1	0	0	2	2	3	142		2,171
博多	公共	5	0	2	27	0	3	11	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	50	295	150
	民間	9	0	11	109	0	30	39	0	16	4	0	14	0	0	9	2	2	245		2,697
中央	公共	1	0	2	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	25	85
	民間	3	3	3	4	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19		2,162
南	公共	1	0	5	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18	251	221
	民間	20	2	10	113	2	44	20	0	9	1	0	1	0	0	2	2	7	233		2,596
城南	公共	0	0	1	3	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	177	127
	民間	8	1	9	89	1	29	23	0	2	3	0	0	0	0	2	1	3	171		1,377
早良	公共	4	0	3	6	0	6	6	0	1	0	0	4	0	0	0	0	1	31	286	217
	民間	15	2	8	149	0	43	23	0	4	1	0	2	0	0	3	1	4	255		1,830
西	公共	1	0	3	3	0	7	7	0	1	0	0	2	0	0	2	1	0	27	223	139
	民間	18	1	8	113	1	20	15	0	6	1	0	1	0	0	4	6	2	196		1,512
小計	公共	12	0	21	57	0	19	31	0	2	0	0	7	0	0	4	1	2	184	1,445	1,181
	民間	108	10	62	630	5	183	136	0	40	11	0	19	0	0	22	14	21	1,261		14,365
道路下水道局(**)公共汚水枡(市内全域28件)					159			23											総計		
合計		120	10	83	846	5	202	190	0	42	11	0	26	0	0	26	15	23	1,599		

(*)　照会の公共は事業照会件数。民間は窓口およびＦＡＸ照会の合計（小計には区不明20件を含む）。

(**)　道路下水道局の公共汚水枡は複数案件が一括提出されるため、総件数と、審査結果の内訳のみを示す。

窓口等照会

民間業者等による窓口における埋蔵文化財の有無に係わる照会等は7,195件、ファックスでの照会は7,170件、あわせて14,365件である。1,700件増加した昨年よりさらに1,858件の増である。8月より本市ホームページにて、包蔵地外町丁名リストの公開を開始し、利用者の照会の便宜と照会件数の縮小化を図っているが、窓口件数は微増傾向に収まったものの、ファックス照会件数は増加に歯止めがかかっていない。各区別の内訳は表3のとおりで、各区とも1,000件を超え、博多、中央、南区では引き続き2000件を前後している。最多の博多区と最少の城南区との差は1，320件である。

ファックス照会では、包蔵地内1,463件（20%）、包蔵地隣接地内510件（　7%）、包蔵地外5,197件（73%）で、この比率はこの4年間ほぼ変わっていない。

3．埋蔵文化財包蔵地の改訂

本市では、試掘調査や発掘調査などの成果にもとづき、より正確な埋蔵文化財包蔵地範囲の実情に近づけるため、また、事前審査業務の効率を図るため、包蔵地・隣接地の改訂作業を随時実施しており、平成24年度は19件39遺跡で実施した。遺跡の範囲拡大は3件、縮小は1件あり、10件で隣接地の解除を行った。24年度は伊都土地区画整理地等、大規模造成区域内を中心に検討を行い、改訂を行っている。また、平成24年度に新規登録を行った遺跡はなかった。

Ⅲ　発掘調査

1．平成 24 年度の発掘調査

年度の発掘調査件数は、表 9 に示したように、23 年度からの継続事業 4 件、24 年度新規事業 37 件の計 41 件で、このうち 4 件は平成 25 年度に継続である。文化財保護法第 93、94 条に基づく記録保存のための発掘調査 36 件のほか、重要遺跡確認調査 2 件（1204，1223）、史跡整備工事に伴う調査 3 件（1205，1222，1228）の合わせて 5 件を含んでいる。

件の発掘調査総面積は 29,773 ㎡で、前年度に比べ件数は 10 件減少したが調査面積は 32％増加した。（表 6・7）。これは西区金武古墳群での岩石採取による 10，000 ㎡の大規模調査の影響が大きい。公民別では公共事業が 6,801 ㎡、民間事業が 22,972 ㎡であり、民間が 77％を占めた。民間事業総面積は前年とは逆に 58％増加し、公共事業は約 49％の減少となっている。昨年度から、国立大学法人関係の調査は民間事業扱いとしている。今年度は圃場整備事業に伴う調査は行っていない。

個々の発掘調査の面積は、100 ㎡以下が 10 件、101 ～ 300 ㎡が 10 件、301 ～ 500 ㎡が 10 件、501 ～ 1,000 ㎡が 6 件、1,001 ㎡～ 10,000 ㎡が 5 件で、10,001 ㎡以上の調査は今年度もなかった。

300 ㎡以下の小規模調査は 20 件（49％）で、昨年の 29 件（63％）より 14％減少している。1,000 ㎡以上の調査は 5 件 12％と昨年度と同様である。1 件あたりの平均調査面積は 726 ㎡、民間事業では 999 ㎡、公共事業で 378 ㎡で、今年度に限っては公民が逆転している。区ごとでは（表 8）博多区 17 件、西区 16 件、早良区 4 件、中央・南区 2 件で、西区で 3 件増加、博多区では 7 件減少している。面積では西区 22，975 ㎡、博多区 3，825 ㎡、中央 1，280 ㎡、早良区 1，026 ㎡、南区 667 ㎡で、西区で 10，388 ㎡増加。これは前述の大規模調査に起因する。早良区の 3，983 ㎡減少も目立つが、これは圃場整備事業終了の影響である。なお博多遺跡群、箱崎遺跡などでは遺構面が複数あり、これを面ごとに調査しているため、実際の発掘面積は増加する。

Ⅴ　公　開　活　動

市民への公開を目的として、記者発表や現地説明会、体験学習および福岡市埋蔵文化財調査報告書の刊行等がある。平成 24 年度は西区徳永 B 遺跡第 4 次調査と西区飯盛山瓦経塚、博多区比恵遺跡群第 125 次調査、福岡城第 69・70 次（鴻臚館第 30 次）の調査に対し記者発表を行い、飯盛山瓦経塚以外は現地説明会を実施した。

また市内小中学校の体験学習の一環として発掘調査や整理作業への参加を受け入れており、平成 24 年度は、福岡市立東光中学校・那珂中学校・筑紫丘中学校の 3 校を市内各発掘現場及び市内にある 3 整理室において、職場体験学習を行った。公開・活用に資するための埋蔵文化財報告書刊行は、表 5 のとおり計 38 冊が刊行された。

表 4　平成 24 年度福岡市現地説明会・報道発表一覧

番号	調査番号	遺跡名	次	住所	現場担当者	記者発表・現地説明会	見学者（人）	備考
1	1133	徳永 B 遺跡	4	西区徳永地内	井上	2012/6/5 2012/6/9	188	
2	1138	比恵遺跡群	125	博多区博多駅南 5 丁目 110 番 1	荒牧	2012/4/18 2012/4/21	140	
3	1223	飯盛山瓦経塚	1	西区大字羽根戸 868 番 15 外	横本	2012/11/162012/4/22 ～ 29	—	埋文センターで速報展示
4	1205・1222	福岡城跡（鴻臚館跡）	69（30）・70	中央区城内	宮武・星野	2012/11/282012/12/1	203	

表5　平成24年度刊行報告書一覧

集	書名	副書名	収録調査番号
1176	有田・小田部 5 1	―有田遺跡群第 238 次調査報告―	1033
1177	有田・小田部 5 2		8312・8313・8316・8317・8318・8417・8418・8419・8420・8422・8424・8425
1178	井相田 C 遺跡 8	―井相田 C 遺跡第 9 次調査報告―	1040
1179	井相田 C 遺跡 9	―井相田 C 遺跡第 10 次発掘調査報告―	1135
1180	今宿五郎江 1 2	―今宿五郎江遺跡第 3 次調査報告―	8728
1181	今宿五郎江 1 3	―今宿五郎江遺跡第 11 次調査報告 (1) ―	0531
1182	今宿五郎江 1 4	―今宿五郎江遺跡第 14 次調査報告―	1102
1183	今宿五郎江 1 5	―今宿五郎江遺跡第 15 次調査報告―	1121
1184	内野遺跡 2	―内野遺跡第 4 次調査―	1132
1185	大塚遺跡 6	―大塚遺跡第 9・1 1 次調査報告―	0651・0662
1186	香椎 B 遺跡 2	―香椎 B 遺跡第 8 次調査報告―	1014
1187	山王遺跡 6	―山王遺跡第 7 次調査―	1118
1188	中南部 1 1	―寺島遺跡第 3 次調査・比恵遺跡群第 86 次調査・弥永原遺跡第 10 次調査の報告―	1101・0324・0727
1189	徳永 A 遺跡	―徳永 A 遺跡第 5 次・6 次・7 次調査の報告（1）―	0932・1115・1127
1190	徳永 B 遺跡	―徳永 B 遺跡第 3 次調査報告―	0922
1191	那珂 6 4	―那珂遺跡群第 8 8・1 3 1・1 3 4 次調査報告―	1105・1125・0313
1192	那珂 6 5	―那珂遺跡群第 132 次調査の報告―	1113
1193	那珂 6 6	―那珂遺跡群第 133 次調査報告―	1114
1194	那珂 6 7	―那珂遺跡群第 1 3 5 次調査報告―	1136
1195	中ノ原遺跡	―中ノ原遺跡第 5 次調査報告―	1038
1196	野中遺跡	―野中遺跡 1 次調査報告―	9161
1197	博多 1 4 4	―博多遺跡群第 191 次調査報告―	1022
1198	博多 1 4 5	―博多遺跡群第 192 次調査報告―	1119
1199	原遺跡 1 6	―原遺跡第 28 次・30 次調査報告―	1126・1134
1200	原遺跡 1 7	―原遺跡第 29 次調査の報告―	1131
1201	原遺跡 1 8	―原遺跡第 31 次調査報告―	1139
1202	比恵 6 5	―比恵遺跡群第 123 次調査報告―	1036
1203	桧原遺跡 2	―桧原遺跡第 6 次調査の報告―	1123
1204	長峰圃場　1	―松木田遺跡第 4 次調査 1～3・7・8 区の報告―	0905
1205	長峰圃場　2	―内野熊山遺跡第 1 次調査の報告―	1025
1206	長峰圃場　3	―長峰谷口 B 遺跡第 1 次調査の報告―	1111
1207	南八幡遺跡 1 0	―南八幡遺跡第 1 9 次調査の概要―	1120
1208	女原笠掛遺跡	―女原笠掛遺跡第 2 次・3 次調査概報 ―	1035・1204
1209	姪浜遺跡 4	―姪浜遺跡第 5 次調査報告―	0631
1210	元岡・桑原遺跡群 2 2	―第 56 次調査の報告 1 ―	1043
1211	立花寺 6	―立花寺遺跡第 8 次調査の概要―	1012
1212	吉武遺跡群 2 3	―史跡整備に伴う第 2 0 次調査報告―	1042
1213	史跡　鴻臚館跡 2 0	―南館部分の調査（2）―	8829・8910・9005・9130・9236・9420・9537・9620
	福岡市埋蔵文化財年報 VOL.26		1108・1124・1144・1147・7205・8203

V　平成24年度発掘調査概要・報告

調査概要・報告は表9の調査番号順に掲載し、一番号は右ページの地図に一致する。また、各報文の図〔1.調査地点の位置〕の（　）内は、左から福岡市都市計画図図福番号・図福名称・遺跡番号・縮尺である。

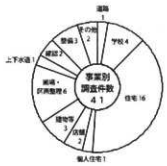
表6　発掘調査件数の推移（　）前年度からの継続件数

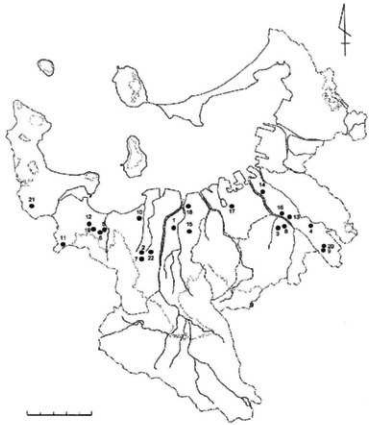
事　業	18年度		19年度		20年度		21年度		22年度		23年度		24年度	
民　間	52	(3)	44	(4)	38	(0)	21	(6)	30	(0)	27	(1)	22	(2)
圃場整備	1	(1)	0	(0)	0	(0)	4	(0)	4	(2)	1	(3)	0	(0)
公　共	27	(6)	33	(4)	29	(4)	25	(3)	16	(3)	23	(3)	19	(2)
合　計	80	(10)	77	(8)	67	(4)	50	(9)	50	(5)	51	(7)	41	(4)

表7　発掘調査面積の推移（㎡）

事　業	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
民　間	12,265	15,184	17,651	11,190	15,649	6,175	22,972
圃場整備	56,000	21,000	0	0	9,774	1,984	0
公　共	22,708	56,530	48,729	33,099	22,856	15,322	6,801
合　計	90,973	92,714	66,380	44,289	48,278	23,480	29,773

表8　発掘調査内訳





発掘調査地点位置図

表9　平成24年度調査一覧(前年度からの継続含む)

位置	遺跡名	次数	調査番号	調査原因	区	所在地	調査面積	調査開始	調査終了	遺跡略号	備考	報告書
1	有田遺跡群	245	1209	戸建住宅	早良	小田部5丁目20番21番	185.0	H24.8.18	H24.7.17	ART		1214
	有田遺跡群	246	1230	部室増築	早良	有田3丁目9番1号	104.2	H24.12.17	H25.1.18	ART		1216
2	飯盛山瓦経塚	1	1223	重要遺跡確認調査	西	大字羽根戸860番45外	30.3	H24.10.3	H24.10.31	IMG		
3	井尻B遺跡	37	1203	共同住宅	南	井尻4丁目174番1、174番2	607.8	H24.4.17	H24.7.12	IGB		1218
	井尻B遺跡	38	1215	共同住宅	南	井尻5丁目160番12	59.1	H24.8.2	H24.8.22	IGB		1219
4	板付遺跡	72	1206	共同住宅	博多	板付2丁目13-14、13-21	315.0	H24.5.7	H24.6.13	ITZ		1220
	板付遺跡	73	1233	共同住宅	博多	板付五丁目4番4、2021番、2018番	50.7	H25.2.13	H25.2.22	ITZ		本書
5	今宿五郎江遺跡	16	1220	管守家庭施設	西	今宿町137	203.0	H24.10.9	H24.10.25	IZG		1222
6	大塚遺跡	18	1117	伊都区画整理	西	今宿町312-4外	394.0	H23.7.25	H24.6.7	OTS		
	大塚遺跡	19	1202	伊都区画整理	西	今宿町306-21他	676.2	H24.4.4	H24.8.30	OTS		1223
	大塚遺跡	20	1218	伊都区画整理	西	今宿町308-1外2筆	600.0	H24.8.6	H24.11.30	OTS		1223
	大塚遺跡	21	1218	伊都区画整理	西	今宿町273-1外	175.0	H24.9.3	H24.10.25	OTS		1223
	大塚遺跡	22	1219	伊都区画整理	西	今宿町334-6	580.2	H24.9.5	H24.12.17	OTS		1223
7	金武古墳群	8	1212	畜石採取	西	大字吉武字七郎谷765-18外13筆	10,000.0	H24.7.10	継続中	KYK	吉武D・C・D・E・G群	
8	笹原遺跡	4	1225	共同住宅	博多	諸岡5丁目69番	181.52	H24.10.15	H24.11.21	SSB		1224
9	雑餉隈遺跡	18	1208	戸建住宅	博多	昭南町2丁目27番	105.1	H24.6.18	H24.7.17	ZSK		本書
10	城ノ原遺跡	2	1234	戸建住宅	西	上山門2丁目1021-1	277.0	H25.2.18	H25.2.28	JNH		本書
11	周船寺遺跡	21	1213	共同住宅	西	周船寺1丁目519-3	140.0	H24.7.15	H24.7.25	SSJ		本書
12	徳永B遺跡	4	1133	伊都区画整理	西	徳永地内	1,421.0	H23.11.15	H24.8.31	TOB		1229
13	那珂遺跡群	136	1210	共同住宅	博多	那珂一丁目688-1・688番3・688-4	81.4	H24.7.8	H24.7.28	NAK		1230
	那珂遺跡群	137	1211	共同住宅	博多	那珂一丁目689-5	25.0	H24.7.29	H24.7.31	NAK		1230
	那珂遺跡群	138	1214	共同住宅	博多	竹下5丁目18	19.0	H24.7.17	H24.8.1	NAK		1230
	那珂遺跡群	139	1217	自宅兼共同住宅	博多	那珂1丁目333-1、333-2	414.4	H24.8.20	H24.10.16	NAK		1231
	那珂遺跡群	140	1224	共同住宅	博多	竹下5丁目16-1	34.4	H24.11.19	H24.12.3	NAK		1230
	那珂遺跡群	141	1231	店舗	博多	那珂一丁目324、325、326、327、332	11.0	H24.12.10	H24.12.14	NAK		本書
	那珂遺跡群	142	1232	共同住宅	博多	那珂一丁目92番	408.7	H25.1.23	H25.3.21	NAK		
	那珂遺跡群	143	1235	個人住宅	博多	東光寺町一丁目238、239	58.0	H25.3.13	継続中	NAK		
14	博多遺跡群	183	1201	電線地中化工事	博多	博多駅前1丁目地内	118.0	H24.4.4	H24.6.27	HKT		1235
	博多遺跡群	184	1221	学習塾	博多	御供所町1-1	400.0	H24.10.9	H25.3.8	HKT		
15	原遺跡	32	1226	道路拡幅	早良	原6丁目地内	378.9	H24.11.7	H25.3.5	HAA		1236
16	比恵遺跡群	125	1138	共同住宅	博多	博多駅南5丁目110番1	995.0	H24.1.16	H24.6.26	HIE		1237
	比恵遺跡群	126	1229	事務所	博多	博多駅南五丁目43番2	156.0	H24.12.17	H25.1.27	HIE		1238
17	福岡城跡	69	1205	史跡整備	中央	城内	1,180.0	H24.4.12	H25.3.29	FUE	地域振興30次	
	福岡城跡	70	1222	石垣修復工事	中央	城内1番1、1番2	100.0	H24.9.24	継続中	FUE	上之橋	
18	藤崎遺跡	37	1207	店舗付共同住宅	早良	藤崎1丁目9番	358.0	H24.8.11	H24.9.14	FUA		1240
19	女原笠掛遺跡(女原五重塔)	3(2)	1204	確認調査	西	大字女原字向原	449.8	H24.4.23	H24.12.26	MRK		1243
20	麦野C遺跡	15	1227	共同住宅	博多	銀天町三丁目28番2、28番5、28番6	451.5	H24.11.1	H25.1.11	MGC		1244
21	元岡・桑原遺跡群	57	1103	学校建設	西	大字元岡字二又	5,143.0	H23.4.9	継続中	MOT		
	元岡・桑原遺跡群	58	1110	学校建設	西	大字元岡	658.0	H23.6.20	H25.3.15	MOT		
	元岡・桑原遺跡群	59	1140	学校建設	西	大字元岡	1,838.0	H24.1.23	H25.3.15	MOT		1246
22	吉武遺跡群	21	1228	史跡整備	西	大字吉武字高木188番	390.0	H24.11.5	H24.11.16	YST		

概　要

1103 元岡・桑原遺跡群第 57 次（ＭＯＴ－ 57）

所在地　西区大字元岡字二又　　調査面積　1,660 ㎡（総面積 5,700 ㎡）
調査原因　大学移転用地造成　　担当者　大塚紀宜
調査期間　2011.4.12 ～継続中　　処　置　記録保存

位置と環境　前年度の継続である。本年度は調査区の北側部分となる谷奥方向に範囲を拡大して、調査を進めた。

検出遺構　調査区内で計 4 面の遺構面を確認した。最上面は中世に該当し、小規模な建物や柵等の遺構を確認した。第 2・3 面は古代の遺構面と推定され、鍛冶炉を検出した。鍛冶炉は 2 ～ 3 基単位で一群を形成し、当時の操業形態を示している。前年度調査範囲で検出した製錬炉は 24 年度調査範囲では確認できなかった。第 4 面は古墳時代後期の遺構面とみられ、明瞭な遺構は検出できなかったが、多量の遺物包含層を確認している。谷部最下層には弥生時代中期後半の土器が若干含まれる。

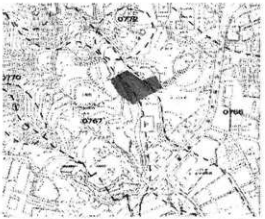
中央の谷に直交する方向で西側部分に小規模な谷を検出し、古墳時代から古代の遺物が出土した。遺物の時期によって、この谷は中世の時期にはほぼ埋没したことが判明している。

出土遺物　24 年度調査では中央の谷部分を中心に土器・鉄滓などパンケース 100 箱以上の遺物が出土した。遺物の時期は弥生時代中期後半から中世後半にわたるが、7 ～ 8 世紀の遺物の出土量が最も多い。古墳時代後期の層から馬歯が出土している。

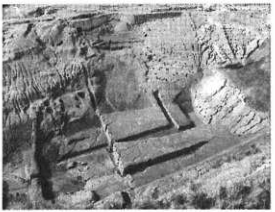
まとめ　23 年度に引き続き、古代から中世にかけての遺構を確認した。鍛冶炉は 7 世紀後半～ 8 世紀と推定され、製錬炉と立地を違えて築造されたことがうかがえる。また谷部分に堆積している遺物の量より、調査範囲より谷奥部にも遺構が存在する可能性が高いことが推測される。

25 年度は谷の東側斜面に調査区を広げて確認を進めていく予定である。

報告書の刊行は平成 27 年度の予定である。



1．調査地点の位置（140 元岡　2782　1：8000）


2．調査範囲全景（東から）

3．鍛冶炉（SK-060）（南から）

1110元岡・桑原遺跡群第58次調査（MOT－58）

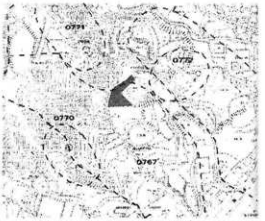
所在地　西区大字元岡字二又　　調査面積　　㎡
調査原因　大学移転用地造成　　担当者　大塚紀宜　大森真衣子
調査期間　2012.．～2013.　　処　置　記録保存

位置と環境　調査地点は、九州大学統合移転用地の南側にあり、南東方向に開口する谷の東側で、峰古墳の立地する丘陵の南向きの緩斜面上、標高30～40mに立地する。

検出遺構　遺構は、調査区北側で中世、緩斜面上では縄文時代早期のものを検出した。中世の遺構は、深さ1m～2mを測る断面V字の大溝となる。縄文時代早期の遺構としては、石組炉1基、2つの礫群が検出された。石組炉は楕円形の土坑を掘った後、その側面に花弁状に石を配置するように構築されており、石材には被熱の痕跡も確認されている。後世の造成により大部分が削平されていたが、中

出土遺物　世期の遺物は須恵器・土師器片がわずかに出土し、また、約200㎡にわたって良好な縄文時代早期の遺物包含層が残存していた。1～2cmの小型両脚鏃、石槍、磨製石斧、石皿等の石器類や無紋土器や押型文土器、刺突文土器、撚糸文土器、条痕文土器などの縄文時代早期の土器類も多数出土し、合わせて4000点以上となった。

まとめ　今回の調査地は、後世の造成の影響を大きく受けているとはいえ、中世時期の大溝をはじめとして、縄文時代早期の包含層が良好な状態で残存していた。特に、縄文時代早期の包含層では出土する遺物の遺存状況も良く、柏原遺跡、元岡・桑原遺跡群第3次調査地点、大原D遺跡、松木田遺跡に続く、当該期の比較的まとまった量の資料を得るに至っている。これらの資料の中には、押型文土器でも古手に位置づけられる川原田式土器と類似する資料も確認されており、その時間的位置づけも含めて重要であると考えられる。調査報告書は平成26年度刊行予定である。



1．調査地点の位置（140元岡　2782　1：8000）

2．縄文時代包含層完掘状況（南から）

3．石組炉（南から）

1205 福岡城跡第 69 次調査（ＦＵＥ－６９）

所 在 地　中央区城内　　調査面積　1,180 ㎡
調査原因　範囲確認調査　　担 当 者　吉武学
調査期間　2012.04.12～2013.03.29　　処　置　現地保存

位置と環境　博多湾のほぼ中央部に突き出した丘陵上に立地する。

検出遺構　平成 18 年度から平和台球場北半分を対象とした第５期調査を行っており、本年度は２ヶ所のトレンチで調査を実施した。トレンチ５では福岡城整地盛土を除去して鴻臚館跡関係遺構の調査を行った。東側に向って台地が落ちて行き、東半部は台地部より４ｍ低くなる。鴻臚北館の東門から東へ伸びる入り口部分の解明が期待されたが、中世に削平を受けていた。台地部分では第Ⅱ期（８世紀前半）東門の精査を行い、南館より北館が一回り小さい門であったことを確認した。トレンチ６では福岡城跡関係遺構の調査を行い、武家屋敷の敷地境界溝や建物基礎などを確認した。築城時のものとみられる境溝を検出し、江戸期のなかで屋敷境が移動していることが分かった。次年度は境溝を保存しつつ、下層の鴻臚館関係遺構の調査を進めていく。

出土遺物　古代の瓦を中心に陶磁器・須恵器・土師器、中世～近世の瓦・陶磁器など。

まとめ　これまでの調査成果を含めて考えると、鴻臚館東面は建物のある台地から比高差１ｍの段差を経て幅 20 ｍの広場となり、広場の東は緩い斜面となり、海岸から続く砂丘上に降りていくと推定される。

1．調査地点の位置（60 舞鎖　0192　1：8000）

2．トレンチ５全景（東から）

3．トレンチ５（東から）

報　告

1208雑餉隈遺跡第18次調査(ZSK－18)

所 在 地 福岡市博多区昭南町２丁目27番　　調査面積 １０５ ㎡
調査原因 専用住宅建設　　担 当 者 小林義彦
調査期間 2012.6.18～7.6　　処　　置 記録保存

１．立地と歴史的環境　(Fig. 1・2)

雑餉隈遺跡の立地する麦野台地は、春日市と境を接する福岡市の南東端にあり、のどかな山園風景が拡がる農村地帯であった。

この麦野台地上には、麦野A・B・C遺跡が南北に続き、その南西端に南八幡遺跡がある。雑餉隈遺跡は、南八幡遺跡と開析谷を挟んで、その南に位置している。雑餉隈遺跡は、北に開析谷が導入した南北長が300m、東西長が150mの低丘陵で、第18次調査区は、この雑餉隈遺跡のほぼ中央部に位置している。

雑餉隈遺跡では、これまでに17次に亘って発掘調査が実施されている。この雑餉隈遺跡での人跡の初現は、旧石器時代に始まり第5・7・13・

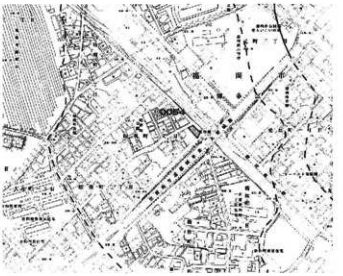


Fig. 1　調査地点位置図 (013雑餉隈 0054　1/8,000)

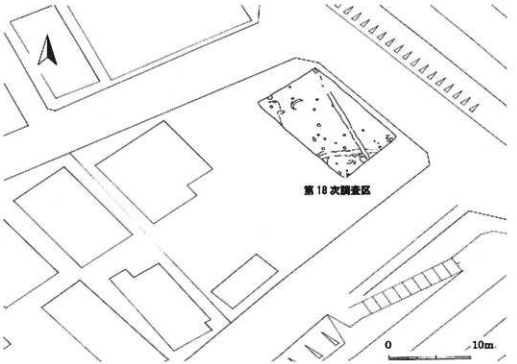


Fig. 2　調査区周辺現況図 (1/400)

14次調査区では石刃や石核・三稜先尖器などが出土している。縄文時代の遺構は未検出である。

弥生時代になると、第14次調査区では前期の土壙や有柄式磨製石鏃や磨製石剣を副葬した木棺墓が、また第5次調査区では、前期の円形住居や貯蔵穴、土壙と中期の方形住居が検出されているが、後期から古墳時代の遺構や遺物は稀薄になる。ところが7世紀末から8世紀になると住居などの遺構が急増し、大集落域が展開する。第9次調査区では、大型掘立柱建物を伴う住居群が検出されている。しかしながら、9世紀になると集落域は小規模になり、しかも短期間のうちに廃絶されたようである。その後、中・近世までの遺構は未検出である。

本調査は、専用住宅の建設に伴う緊急発掘調査で、補助事業として実施した。

2．調査に記録　(Fig. 3　ph. 1)

第18次調査区の基本的層序は、客土層が30～35cmの厚さで堆積し、その直下は基盤をなす鳥栖ローム層になる。鳥栖ローム層は、北へ向かって緩やかに傾斜し、このローム層に溝やピットなどの遺構が掘り込まれている。また鳥栖ローム層の直上には、暗褐色土が薄く堆積しており、その層中からは土師器片が出土している。

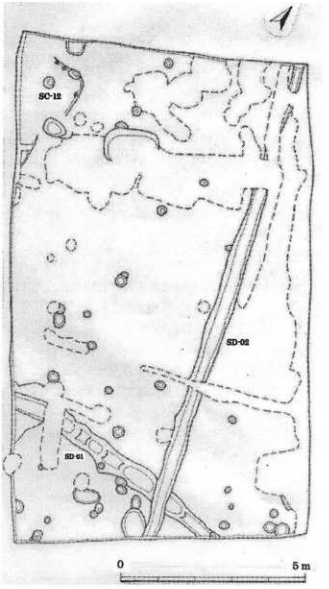
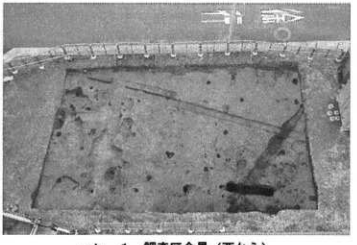


Fig. 3　遺構配置図（1／100）

検出した遺構は、竪穴住居1棟、土壙1基、溝2条とピットを検出したが、全体に削平を受けて遺構の遺存状況は余り良くなく、ピットも建物としてはまとまらなかった。

12号住居　SC－12
(Fig. 4･5 ph. 2～5)

12号住居は、調査区の北西隅に位置し、すぐ北には13号土壙がある。住居跡は、削平が著しく西半部は消失しているが、平面形は、一辺が3mほどの方形プランをなそう。壁面は、垂直に立ち上がり、



ph. 1　調査区全景（西から）

壁高は 15～20cm で北壁と東壁の北東隅壁際には 7～10cm 径の小穴があり、壁面の崩落防止的な構築杭が打設されていたものであろう。南壁側には、床面から約 10cm の高さに幅が 40～50cm ほどのベッド状をなすフラット面が付設されている。東壁の中央部には竈が付設されているが、北袖の一部を残して大半が消失している。袖は灰白色粘土で築き、その内側には東西が 67cm、南北が 44cm、深さが 12cm の楕円形プランの小土壙があり、壙底は淡く赤変していた。竈は、袖間が約 100cm で、煙道部は東半分が壁外に張出した構造に復原される。床面は、平坦であるが中央部が凹レンズ状に浅く窪んでいる。遺物は、竈の北袖際から土師器甕片と須恵器坏、鉄鏃片が出土した。

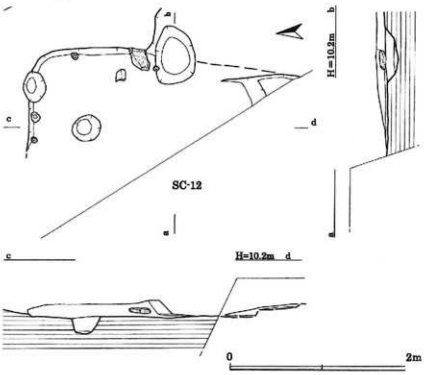
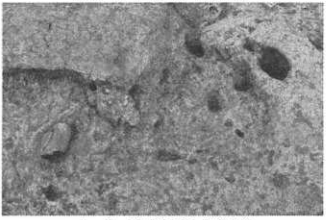


Fig. 4　12 号住居実測図（1／40）

ph. 2　12 号住居（西から）



ph. 3　12 号住居竈（西から）

1 は、口径が 24cm の土師器甕。口縁部は「く」字状に大きく外反し、胴部は緩やかな倒卵形をなそう。口縁部外面は指頭押圧後に外面がヨコナデ、内面はヨコハケ目。胴部は、外面が粗いタテハケ目、内面はヨコ方向のヘラケズリ。胎土は粗く、微細～小砂粒と少量の石英中～粗砂粒と雲母微細粒を含む。2・3 は、鉄鏃の茎。2 は、現長が 4.71cm で、断面形は幅が 0.8cm、厚さが 0.66cm の長方形。3 は、茎の先端部で現長は 1.88cm で、断面形は長方形をなす。

13 号土壙　SK－13　(Fig6)

13 号土壙は、調査区の北西に位置する。南壁は消失しているが、平面形は、長辺が 150 cm、短辺が 100 cmの隅丸長方形プ

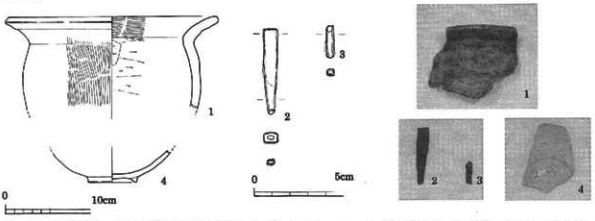


Fig. 5　12号住居・1号溝出土遺物実測図（1／2・1／4）ph. 4　12号住居・1号溝出土遺物（縮尺不同）

ランをなし、主軸方位はN－50° 45′ －E。壁高は34cmで、壁や緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形。覆土は、黄褐色粒と小ブロックを含む黒色土の単一層。土師器小片が出土した。

1号溝 SD－01(Fig.7　ph.1・4)

1号溝は、調査区の南隅にある東西方向の溝で、東端は2号溝と直交し、それよりも古い。溝幅は50～65cmで、縦断面は高低のある不規則な階段状をなし、深さは浅い東端で12～20cm、中央の最深部で52cm。標高は9.38m。壁面は緩やかに立ち上がり、横断面形は溝底が浅い凹レンズ状の逆台形をなす。土師器や須恵器の甕片や滑石製石鍋片が出土した。

4は、高台径が5.4cmの土師器塊。体部は、扁平な半球形で胎土は細～石英中砂粒と雲母微細、赤褐色粒を含む。

2号SD－02(Fig.7)

2号溝は、調査区の東を磁北に沿って南北流する浅い溝。溝幅は43～50cmで、壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は15～20cm。溝底は、浅い凹レンズ状の舟底状をなす。覆土は、茶褐色～暗茶褐色土で須恵器坏や土師器小片がわずかに出土した。

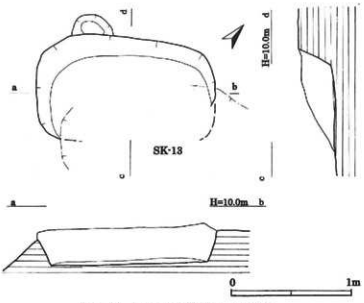
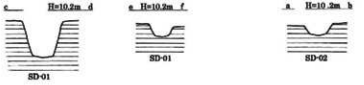


Fig. 6　12号土壙実測図（1／30）



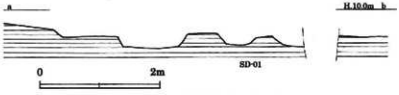


Fig. 7　1・2号溝断面図（1／60）

1212 金武古墳群第８次調査（ＫＹＫ－８）

所 在 地　西区大字吉武地内
調査原因　土取り
調査期間　2012.7.10 ～ 2014.6
調査面積　古墳 23 基
担 当 者　加藤隆也・阿部泰之・福薗美由紀
処　　置　記録保存

位置と環境　早良平野を取り巻く丘陵には、約 700 基の後期群集墳が確認されている。金武古墳群は飯盛山の南麓、糸島平野と早良平野を繋ぐ日向峠に沿って形成された約 150 基から構成されている古墳群である。そのうち、北側を金武吉武、南側を金武乙石と呼称し、それぞれ 18 群と８群の支群に分けられている。これまでの調査では、吉武Ｌ群とＧ群から新羅土器が出土していることが特筆される。

1．調査地点の位置（107 乙石　0595 ～ 0597　1：8000）

検出遺構　今回の調査対象古墳は、金武吉武のＢ群（12 基）のうち５基、Ｃ群（４号墳消滅）の４基、Ｄ群（４号墳消滅）の 11 基、合計 20 基である。調査地は、標高 100 から 130 メートルを測る急峻な南側斜面に位置しており、眼下には峠道が通っている。古墳玄室の平面プランは長方形のものと方形を呈するものがある。またＤ群の 11 号墳は前室を有する複室構造である。

調査対象古墳は、すべて開口しており、２基以外は天井石が抜き取られており、副葬遺物の遺存状況は悪い。

2．Ｄ群全景（南から）

出土遺物　主な出土遺物は、須恵器片、土師器片や馬具の一部と考えられる金属破片、Ｕ字型鏃先や鏃など鉄製農具の断片、また少量の耳環、瑪瑙・翡翠製勾玉、水晶切子玉、ガラス小玉などの装飾品がみられる。早良平野の群集墳の特徴とされている鉄滓の供献であるが、現調査のすべての古墳から出土している。その出土位置は、後世の撹乱が著しいこともあるが墳丘、玄室、閉塞、羨道、前庭部など一様にみられる。

3．Ｄ群 11 号墳全景（南から）

まとめ　造営時期は石室内出土遺物から６世紀末から７世紀前半ごろと考えられる。

発掘調査は平成２６年度まで継続される計画であり、報告書は２８年度に刊行される予定である。

報　告

1213　周船寺遺跡第 21 次調査（SSJ-21）

所在地	福岡市西区周船寺 1 丁目 519-3	調査面積	139.6 ㎡
調査原因	共同住宅建設	担当者	大塚紀宣
調査期間	2012.7.12 ～ 7.25	処　置	記録保存

調査にいたる経緯

平成 24 年 6 月 12 日に上記地内における共同住宅建設の建設に伴う埋蔵文化財の有無について照会が提出された。これをうけて埋蔵文化財事前審査課で同年 7 月 2 日に試掘調査を行ったところ、地表面から 90 ～ 95cm の深さで柱穴等の遺構と土器片を検出した。この結果をうけて原因者と協議を行い、予定建築物の範囲について調査を実施することになった。

調査地点の位置と周辺環境

今回の調査地点は周船寺遺跡群全体の北西部分にあたる。周船寺遺跡は瑞梅寺川東側の沖積地の上に作られた集落・墓地で構成される遺跡で、微高地上に遺跡が散在していた景観が想定されている。

Fig.1　調査地点の位置（131 泉　0689　1:8000）

今回の調査区の西側には、弥生時代前期から中期の集落・甕棺墓群が出土した第 7 次調査地点等の遺構・遺物が確認された地点が存在し、この地区が弥生時代前期までに陸化し、稲作開始時期の集落が営まれていたことがこれまでに明らかになっている。

調査の経過

調査は既存建物の解体後の 7 月 12 日より開始し、調査区西側半分の調査を先行した。しかし折から梅雨末期の豪雨に連日襲われ、17 日にようやく本格的に調査を開始できた。西側部分は翌 18 日まで調査を行い、19 ～ 20 日に排土を反転して東側半分の調査に着手し、23・24 日に東側半分の調査を実施し、25 日に調査区を埋め戻して調査を終了した。

検出遺構と遺物

遺構が存在する面は現在の地表から 90cm 低い、旧水田耕作土層の下で検出された。遺構面の土質は薄灰色シルトで、遺構覆土は上層の包含層と同質の黒色粘土である。水田耕作土の上層には造成盛土が 50cm 以上堆積する。

検出した遺構は柱穴・溝・土坑である。柱穴は調査区西側で密度が濃く、この部分に建物があったものと想定できる。調査区東側の柱穴は密度が薄く、径も小さいことから小型の建物や柵などの構築物に関係するものと考えられる。以下、個別の遺構について記述する。

SK-001

調査区中央部南側で検出された楕円形の遺構で、遺構東側は反転時に確認できていない。検出部分で長 2.2m、幅 1.7m、深さは 10cm 以下でごく浅い皿状を呈する。遺構の形状や覆土の状況から、遺構面の浅い凹みを検出した可能性が高い。比較的まとまった数の遺物が出土しており、遺物が流れ込んで滞留した様相を示す。

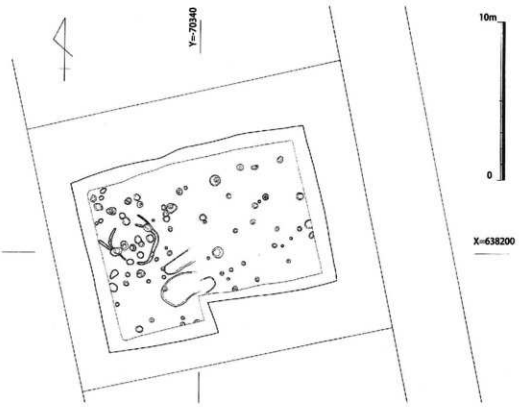


Fig.2　調査区位置図（1：200）

出土遺物　1～3は甕形土器。1は口縁が如意状に緩く開き、口唇部に刻目を施す。2は口縁下の屈曲部で、突帯状に作り、刻目を施す。3は口縁が緩く開き、口縁下に突帯を持つもので、口縁部と突帯部に刻目をもつ。4は浅鉢で、口縁は断面三角形で刻目を施す。7は壺形土器の底部。いずれの破片も摩滅が著しく、器表面の剥落が著しい。

SK-002

SK-001の北側に位置する溝状の遺構で、遺構東側は反転時に確認できない。長1.9m以上、幅75cm、深さ15cmで、この遺構も人為的なものではないとみられる。

出土遺物　8は壺形土器底部破片。端部は両側に張り出し、底面はわずかに上げ底状を呈する。

SD-003

隅丸方形に巡る溝状遺構で、遺存部分は北西側・南東側の2つに分かれる。溝の幅は10～20cm、遺構面からの深さは7～10cmで、断面形はU字状を呈し、床面は平坦である。溝内に柱穴状の掘り込みが2ヶ所あり、掘り込みは対称に位置している。溝で区画された略方形の範囲内に、この溝に伴う柱穴は特定できない。この溝によって区画される範囲は南北2.5m、東西2mの長方形で、この溝が住居等の付帯施設である可能性がある。

この方形の溝から分岐するようにSD-004・005の2本の直線的な溝が延びる。SD-004・005はほぼ平行に延び、溝の幅・深さはSD-003と類似する。

出土遺物はいずれも小片で、器形など詳細が判明するものはない。胎土の質からみて、縄文時代晩期の遺物を主体として構成されている。

その他の遺物

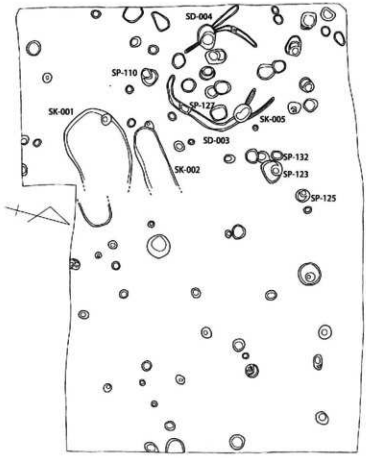


Fig.3　調査区全体図（1：100）

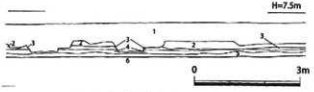


Fig.4　調査区東壁土層図（1：100）

5は壺形土器の頸部付近破片で、SP-127出土。頸部は胴部から屈曲して内傾して立ち上がる。外面は横ミガキ調整。6は浅鉢の口縁部破片で、SP-132出土。口縁部は頸部で屈曲し内側に湾曲して立ち上がる。外面はミガキ調整の可能性がある。9は弥生土器の甕形土器底部でSP-135出土。10も弥生土器の甕形土器底部で、SP-123出土。

11は打製石鏃でSP-123出土。黒曜石製で長2.1×幅1.6×厚さ0.3cm、重量0.7g。先端と脚端部がわずかに欠けるがほぼ完形で、基部が浅く抉れる三角形を呈する。12は打製石鏃でSP-110出土。黒曜石製で、両脚端部を欠損する。長2.5×幅1.6×厚さ0.5cm、重量0.9g。抉りの浅い二等辺三角形を呈していたとみられる。

まとめ

今回の調査は遺構が良好な形で遺存しており、遺構の時期を特定できる形で遺物が出土したことも評価できる。検出した土坑・溝状遺構・柱穴から出土した遺物は大部分が縄文時代晩期（弥生時代早期）のものに限定され、他の時期の遺物がほとんどみられないことから、各遺構の時期は縄文時代晩期を中心とし、一部弥生時代前期の柱穴が存在するとみられる。

また、出土遺物の多くは細片で摩耗が進んでいることを考慮すると、これらの遺物は原位置近くにあったものとするよりは、遺構廃絶後、間もなく隣接地より流れ込んだと考えるほうが適当であろう。

周船寺遺跡群の各地点で縄文時代から弥生時代の資料が出土しており、今回の調査地点付近にも当該時期の集落が営まれていたものと考えられる。

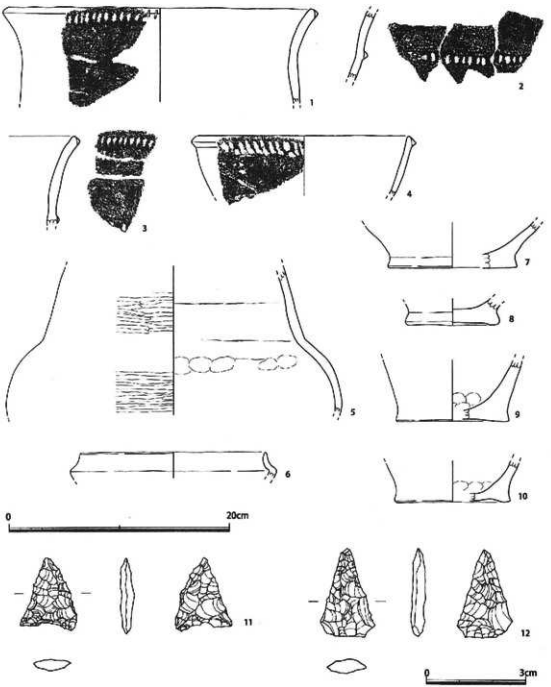
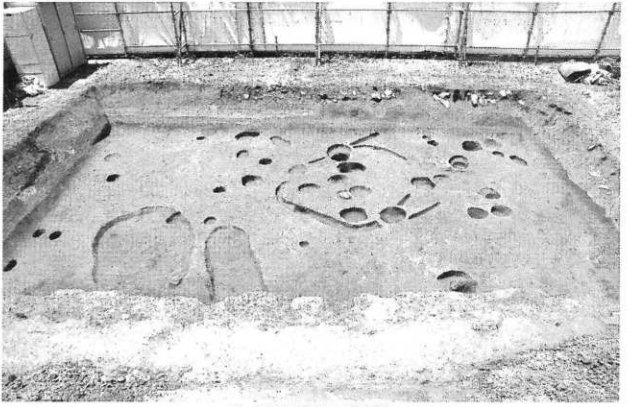
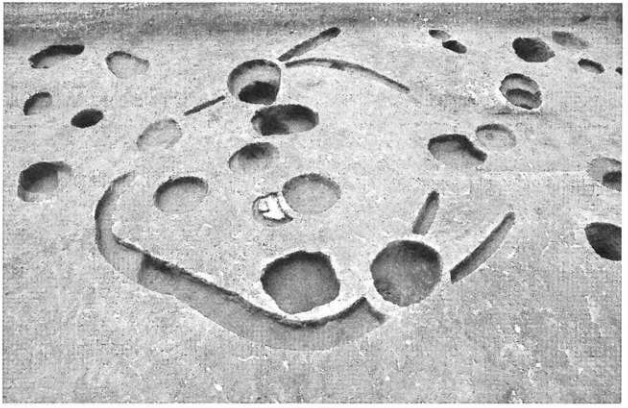


Fig.5　出土遺物（1：3・1：1）

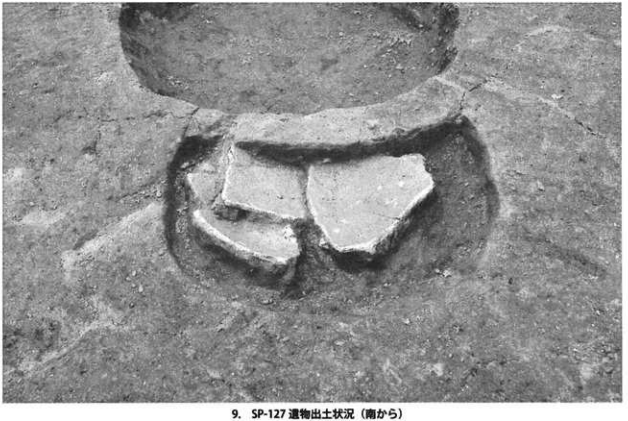


6. 調査区西半部全景（東から）

7. 調査区東半部全景（西から）



8. SD-003（東から）



9. SP-127 遺物出土状況（南から）

概　要

1221 博多遺跡群第 194 次調査（ＨＫＴ－１９４）

所 在 地　中央区城内　　調査面積　439 ㎡
調査原因　寮建設　　担 当 者　屋山洋
調査期間　20121009 ～ 20130315　　処　置　記録保存

位置と環境　博多遺跡群は北が博多湾に面し、東西を御笠川、博多川に挟まれ、南側を房州堀で区切られる南北 1.5 ㎞、東西 0.8 ㎞の範囲で、弥生時代前期以降連綿と人が生活した痕跡が残っている。今回発掘調査を行った 194 次調査区は博多遺跡群の南東隅に近く、東西方向に延びる砂丘の尾根にあたり博多遺跡では基盤砂層の標高が最も高い地域である。

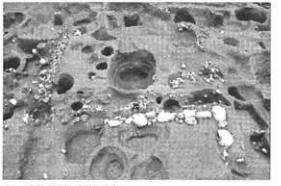
検出遺構　検出した遺構は弥生時代中期の土坑と柱穴が最も古く、その後は 7 ～ 8 世紀の古代の土坑であるが、後世の削平をうけ、遺物は多く出土したものの、遺構の数は少なかった。11 ～ 12 世紀になるとⅠ区東側を 1.5 m程掘り下げ石垣を築いているが、12 世紀中頃には埋没したようである。掘り込みの中からは多量の瓦や碑等の遺物が出土したが、瓦の中には鴟尾や鬼瓦片も見られる。13 ～ 14 世紀頃になるとⅠ区では製鉄が行われるようになり、廃滓土坑がいくつかみられる。基壇が築かれ小規模な礎石建物が数軒建てられている。ただⅡ区では根石を持つ柱穴状遺構が多く、鉄滓も多量には出土しないなどⅠ区とⅡ区では様相が異なる。この時期には井戸も多く掘られ、Ⅰ区で 7 基、Ⅱ区で 13 基の井戸が掘られている。近世になるとⅡ区南半に近世墓が築かれはじめ、土壙墓と甕棺墓が 20 基程出土した。表土剥ぎで 17 世紀中頃から 18 世紀後半の墓石が 25 基程出土しており、Ⅱ区出土の近世墓に伴うものと思われる。

出土遺物　各時期の土器・陶磁器など 394 箱が出土した。

まとめ　古代末の瓦が出土する石垣遺構や、中世の礎石建物など、これまでの博多遺跡群では発見例の少ない遺構が見つかっている。報告書の刊行は平成 26 年度の予定である。

1．調査地点の位置（049 天神　0121　1：8000）

2．石組み（北から）



3．建物基壇（北から）

1222 福岡城跡第 70 次調査 (FUE － 70)

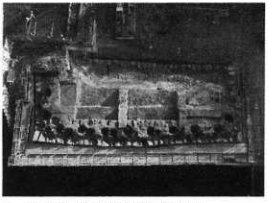
所 在 地	福岡市中央区城内 1	**調査面積**	430 ㎡ (平面積)
調査原因	石垣保存修復工事	**担 当 者**	田中寿夫・中村啓太郎・星野惠美
調査期間	2012.9.20 ～継続	**処　置**	修復工事後保存

位置と環境　福岡城跡は博多湾岸の中央部に向かって延びる舌状丘陵に位置し、築城時には大規模な造成が行われている。今回修復工事を行っている上之橋御門は城の北東に位置する正門にあたり、丘陵裾部を埋め立て造られている。石垣の天端面は東西約 28m、南北約 10m、高さ約 10m を測る。石垣は根石部分に玄武岩を使用するが、概ね花崗岩の割石を乱層積みし、隅角部は算木積みを行う。従来から築石面の孕み出しによる変異が確認されていたが、平成 17 年に発生した福岡県西方沖地震により一層顕著化し、崩壊の危険性が生じたため修復工事を行うこととなった。先に行った発掘調査等から変異状況を確認し、立面積 420 ㎡を修復対象とした。

1．調査地点の位置（060 舞鶴　0193　1：8000）

調査および修理工事　明治以降に造られた天端面の塀を撤去し、その直下で遺構検出を行った。その後、石垣最上段 (1 段目) の築石や裏込石を露出させ、図化、写真撮影等の記録を行うとともに、石積みの手法や裏込めの状態、変異の要因等の観察を行ったうえで、クレーンや人力によって、石垣を解体した。これらの作業を築石の 1 段毎に繰り返し行い解体を進めた。調査の結果、J 面で行われた昭和 47 年度の解体工事が、石垣の孕みの原因の一つであることが判明した。裏込めには多くのコンクリートの塊・土等が混在し、空隙も多く、その状況は解体範囲外にも及んでいたため、解体範囲を広げ、工事を行うこととなった。さらに天端面から約 1.1m 掘り下げた段階で江戸時代のものと考えられる塀の控え柱を検出した。柱穴は直径約 1.5m、深さ約 1.0m、柱間は約 3.0m(約 10尺) を測り、等間隔に並ぶ。柱痕も築石の面から概ね 1.8m 離れた箇所で一部確認でき、直径 27cm の円形を呈する。柱は切り合いがあり、2 時期想定できる。柱穴からは多量の瓦が出土し、黒餅文の軒丸瓦が多く見られた。次年度も引き続き解体を行い、崩壊原因の対策を講じたうえで伝統的技術に基づく工法で積み直しを行う。

2．石垣解体前全景（北西から）



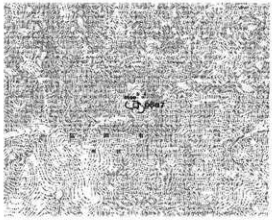
3．石垣解体・控え柱検出状況（北から）

概　要

1223 飯盛山瓦経塚第１次調査（ＩＭＧ－１）

所 在 地　西区大字羽根戸 868 番（飯盛山山頂）　調査面積　30 ㎡
調査原因　確認調査　担 当 者　榎本義嗣
調査期間　2012.10.03 ～ 2012.10.31　処　置　現状保存

位置と環境　本遺跡は、背振山系から北側に派生し、早良平野と今宿平野を画する山塊の一つである飯盛山山頂（標高約 384 m）の山頂部に位置する。瓦経塚の発見は、大正 13 年に遡り、山頂で執り行われた祭事の際に地中の石積み内から法華経を主とする多数の瓦経が出土したことが当時の記録に残る。出土資料は山麓の飯盛神社等に残るが、散逸したものも多い。「永久二年」(1114 年) の紀年銘や早良郡司、結縁僧俗等を記した願文瓦板が現存しており、製作年代や造営の背景が判明する資料としても貴重なことから、現在所在の判明する瓦経の多くが県や本市の有形文化財として指定されているが、瓦経塚の正確な位置や構造等に不明な点が多く、今回国庫補助事業として確認調査を実施することとした。



1．調査地点の位置（106 飯盛山　0587　1：8000）

検出遺構　調査区は、中世山城の築城による２段の平坦面が残る山頂部の最高所に２箇所設定し、このうち西側においてしまりのない埋め戻し土を覆土とする径約２m、深さ約 1.5 mの不整隅丸方形状の掘り方を確認することができた。

2．調査区全景（東から）

出土遺物　埋土からは 100 点を超える瓦経片や平安期の土師器、輸入陶磁器の細片、キセル等が出土し、これらの出土遺物や

まとめ　埋土の状況、掘り方の規模等から大正時代に掘削された盗掘坑と判断した。法華経や無量義経を記した瓦経に完形品はないが、丁附や小口に銘文を有するものが含まれる。

3．出土瓦経

1228 吉武高木遺跡第 21 次調査（ＹＳＴ－２１）

所在地	西区大字吉武地内	調査面積	390 ㎡
調査原因	史跡整備に伴う確認調査	担当者	板倉有大
調査期間	2012.11.05 ～ 2012.11.16	処　置	現状保存

位置と環境　調査地点は、吉武高木遺跡史跡地内の北西部（大石地区）と南部（高木地区）で、旧地形としては北東方向に広がる扇状地上の谷（自然流路）を含めた部分にあたる。大石地区にトレンチ２カ所、テストピット５カ所、高木地区にトレンチ２カ所を設定し、遺構の位置と標高について確認調査を行った。

検出遺構　大石地区では、1985 年調査時の甕棺墓群の墓壙掘り跡を再検出し、遺構上端の平面実測および座標測定を行うとともに、一部の遺構埋め戻し砂を掘削し、墓壙掘り方底面の標高を測量して、以前の調査報告における位置（座標）と標高の補正を行った。また、1.5 m四方のテストピットを５カ所掘削し、各地点の遺構面の標高を測定した。

出土遺物　高木地区では、自然流路の位置と範囲を確認した。また、自然流路西側を確認したトレンチの北西端で甕棺２基を検出し、大石地区の甕棺墓群の範囲がここまで広がることを確認した。

まとめ　今回の確認調査によって、甕棺墓群と自然流路の位置（座標）と標高を把握することができ、当該地を史跡として整備するために必要な情報を得ることができた。

1．調査地点の位置（093 都地　2477　1：8000）

2．大石地区トレンチ①（南東から）

3．高木地区トレンチ②（南東から）

報　告

1231 那珂遺跡群第141次調査(NAK－141)

所 在 地 博多区那珂1丁目324他　　調査面積　１１㎡
調査原因 店舗及び駐車場建設　　担 当 者　荒牧宏行
調査期間 2012.12.12～12.13　　処　置　記録保存

1. 調査に至る経緯

平成24年10月2日、株式会社　旭建設より上記地内におけるコンビニエンスストアー建設に伴い「埋蔵文化財の有無について（照会）」の書類が埋蔵文化財事査課に提出された。これを受けて当課では書類審査を行った。当地は平成23年度に別件の申請を受け試掘を行い、遺構を確認していた。今回、調査区を確定するために11月12日に試掘を実施したが、11月22日に設計変更が提出された。その内容は建物位置を既存倉庫の位置に合わせ、杭も既存の地中梁の範囲に打ち込むというものであった。そのため、調査範囲は既存地中梁の範囲で遺構が遺存する部分に限られた。

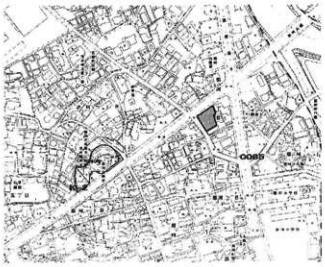


Fig1.　調査地点の位置(023 雀居 0085　1/8,000)

2. 調査区と基本層序

調査区は1区から3区までの3地点に分かれる。遺構面は客土直下の鳥栖ローム である。この標高は1区で標高7.9m、2区、3区で7.3mを測る。

4. 検出遺構

ST01

1区で検出した。器高45cm程度の小型の甕棺と考えられる。12°の傾きで据えられているが上部は削平され欠損している。丸みをもつ胴部で胴部最大径40cmを測る。外面底部周辺と内面に縦方向のハケメが残る。
底部は厚さ1.2cmを測り、ほぼ平坦ないし中央がやや上がる。弥生中期末か。

SD02

1区で検出された溝である。幅70cm、深さ

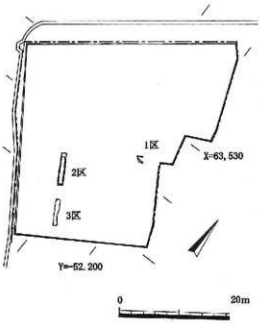
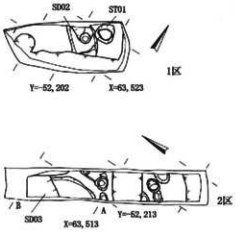


Fig2.　調査区配置図（1/600）



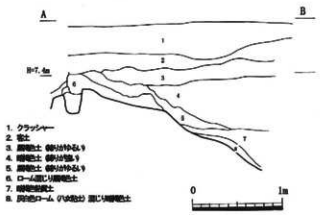


Fig4. SD03土層断面図（1/40）

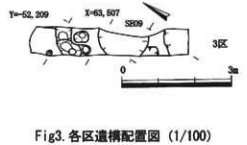


Fig3. 各区遺構配置図（1/100）

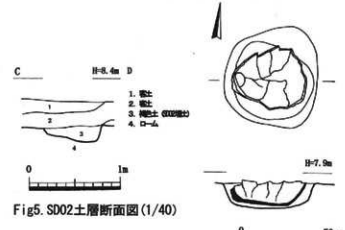


Fig5. SD02土層断面図(1/40)

Fig6. ST01実測図(1/20)

が8～18cm程度である。下底には起伏がみられる。褐色土の埋土で弥生中期以降の壺片が出土したのみである。

SD03

2区で検出された溝である。上面に深さが約20cmまで下がる落ち込みがみられ，その下部から壁面の傾斜角度30°の掘りこみが検出された。深さは検出面から約1.2mまで掘り下げた。この下部の掘りこみの上端のラインは北側へ走行している。埋土は暗褐色土で層界が不明瞭で分層が難しい。

出土遺物は須恵器甕，土師器甕の小片のみが出土した。古墳時代後期以降とみられるが，周辺の調査から中世後半期の溝の可能性がある。

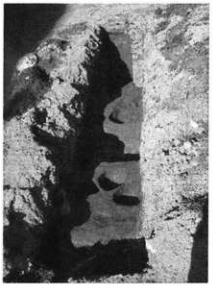
SE09

3区で検出された。径140cmの円形プランを呈す。調査区が狭いため検出面から八女粘土に近い約2mの深さで中止した。中央に径100cmの円形プランの井筒部分が検出された。また，この深さで瓦質の火舎が1個体まとまって出土した。

出土遺物

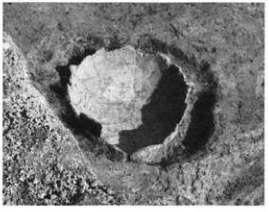
2は口径12cm，器高2.3cmを測る完形の土師器坏である。

Ph.1　1区全景（南西から）

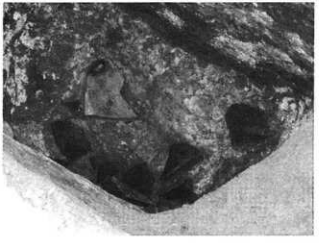


Ph.2　2区全景（南東から）

Ph.3　3区全景（南東から）



Ph.4　ST01検出状況（南から）



Ph.5　SE09内火舎出土状況

Ph.6　SE09出土火舎

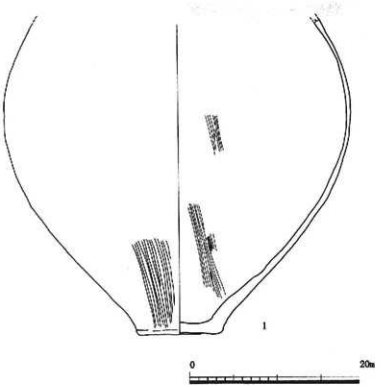


Fig7.　ST01甕棺実測図（1/4）

3はほぼ完形の瓦質火舎である。口径40cm，器高15cmを測る。体部は直線的で口縁端部が肥厚する。体部には花紋2個と3個のスタンプを交互に4か所に施す。底部に接地面が丸みをもった平坦な3足を貼り付けている。体部内面に回転を使ったミガキを施し底部に部分的にミガキがみられる。他はヨコナデないしナデ調整である。色が灰～灰黒色を呈した軟質の焼成である。16世紀代か。

他に曲物片の木器も出土した。

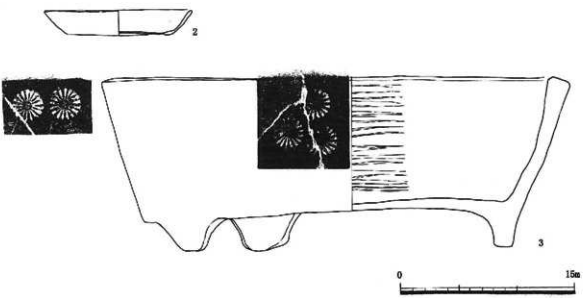


Fig8.　SE09出土遺物実測図(1/3)

概　要

1232 那珂遺跡群第 142 次調査（ＮＡＫ－１４２）

所 在 地　博多区那珂 1 丁目 92 番　　調査面積　409 ㎡
調査原因　共同住宅建設　　担 当 者　濵本正志
調査期間　2013.1.23 ～ 3.15　　処　置　記録保存

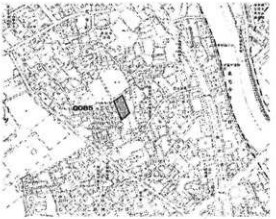
位置と環境　那珂遺跡は、福岡平野中央を北流する御笠川と那珂川に挟まれた洪積台地に立地する。調査地は、遺跡の北西部、北へ延びる春日丘陵の尾根上および東側の斜面に位置し、標高 8.2 m を測る宅地である。遺構検出は台地に堆積した鳥栖ローム層上面で行い、遺構面は地形を反映し東方へ緩やかに傾斜する。

検出遺構　弥生時代中期の円形竪穴住居 1 棟、古墳時代後期の方形竪穴住居 8 棟、土壙墓 1 基、井戸 1 基、土壙、溝状遺構、柱穴・小穴多数などである。弥生時代の竪穴住居は径 6 m を測り、中央部に炉を設けている。他の住居規模は削平が激しく、不明。柱穴および小穴の多数は、古墳時代～古代に比定される竪穴住居や掘立柱建物を構成していたものと考えられる。土壙墓は隅丸長方形の平面形を呈する。

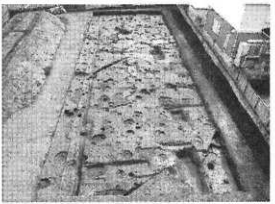
出土遺物　弥生土器、土師器、須恵器、石製品類などがコンテナで 10 箱が出土している。

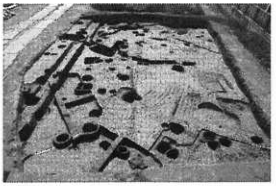
まとめ　今回の調査では、これまで那珂遺跡における丘陵背上の様相が不明であったが、周辺地域においては大規模な削平が認められるものの、鳥栖ロームに代表される洪積層面が良好な状態で残存していることを確認するとともに、弥生時代中期と古墳時代後期の集落の存在を明らかにする成果を得た。同地域においては、弥生時代中期から活発な集落活動が始まり、古墳時代後期からは断続的に生活が営まれていたと言える。那珂遺跡の所在する丘陵における変遷過程を理解する上で重要な資料を得ることとなった。

発掘調査報告書は 2015 年度に刊行予定。



1．調査地点の位置（037 東光寺　0085　1：8000）


2．第 1 調査区全景（北から）


3．第 2 調査区全景（北から）

報　告

板付遺跡第73次調査(ITZ－73)

所 在 地 福岡市博多区板付５丁目４－４他　調査面積 ５０ ㎡
調査原因 分譲住宅建設　担 当 者 小林義彦
調査期間 2013.2.13～2.22　処　　置 記録保存

１．立地と歴史的環境

板付遺跡は、福岡平野の東縁を北流する御笠川中流域左岸の低位河岸段丘上に位置し、開析谷を隔てた南の低丘陵上には高畑遺跡や麦野Ａ～Ｃ遺跡、南八幡遺跡などが立地している。この板付５丁目を中心とする低段丘上には、弥生時代の大規模な集落城とそれに伴う墳墓群や水田跡が拡がっている。この板付遺跡は、二重の環壕に囲まれた集落城で、その西に拡がる沖積地には灌漑施設を伴う夜臼期の水田跡が検出され、水稲耕作を始めた弥生時代開始期の最古の二重環壕集落遺跡として国史跡に指定されている。また、環壕の南東に拡がる前期末の甕棺墓群

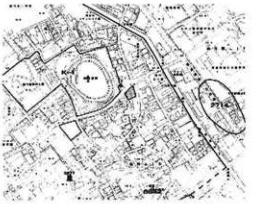


Fig. 1　調査区位置図（024 板付 0842 1／8,000）

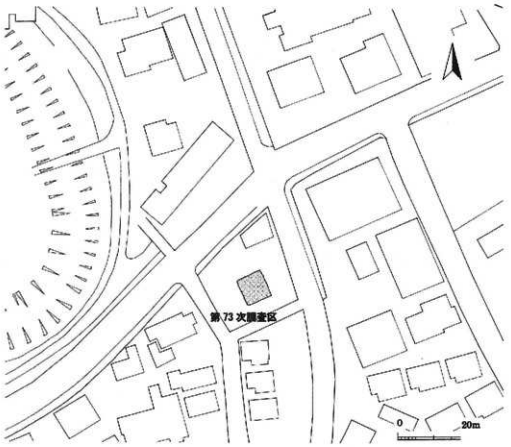


Fig. 2　調査区周辺現況図（1／1,000）

（田端遺跡）からは、細形銅剣と細形銅矛が各3本出土している。第73次調査区の所在する板付5丁目は、内環壕の南東縁に位置し、その北縁には東西に走る県道505号線の新設に伴う発掘調査では、前期から中期の貯蔵穴や井戸跡などが確認されている。

第73次調査区は、北接する県道505号線の調査データから遺構の遺存が予想され、試掘調査の結果、弥生時代の遺物包含層が確認されたことから発掘調査を実施して記録保存を図ることとなった。なお、本事業は分譲住宅の建設に伴うもので、民間受託調査として実施した。

2．調査の概要

発掘調査は、申請地の中央部に東西が7m、南北が8mの方形の調査区を設定して実施した。基本的層序は、ＧＬ－70cmまでは瓦礫の客土層で、その下層に旧耕土がわずかに残り、その下は薄い鳥栖ローム層を残して八女粘土層に達している。このことは、県道505号線の調査結果で得られているデータと同じで、内環壕の南側は微高地が八女粘土層まで大きく削平されていることを示している。また、調査区の北壁側で貯蔵穴が検出され、試掘時に遺物包含層とされた土層は、貯蔵穴の覆土であり、微高地は南東へ緩やかに傾斜している。

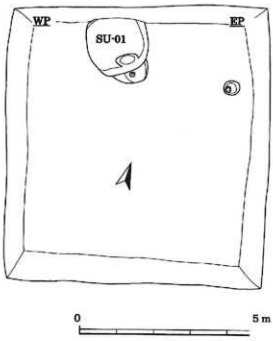
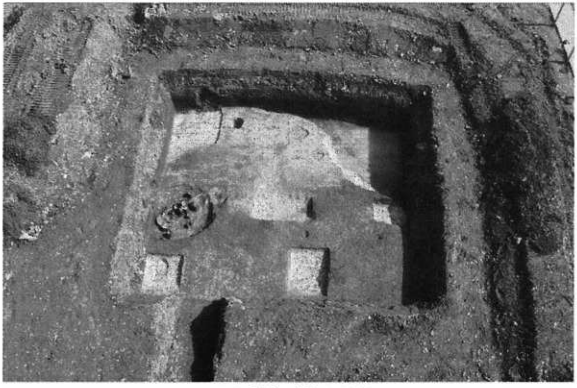


Fig. 3　遺構配置図（1／100）



ｐｈ．1　調査区全景（西から）

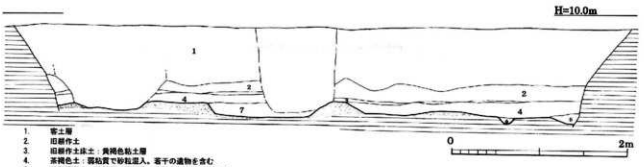


Fig. 4　調査区北壁土層断面実測図（1／40）

1号貯蔵穴 SU－01（Fig. 5～7 ph. 3～5）

1号貯蔵穴は、調査区の北部にあり、北壁の一部は調査区外に拡がっている。床面の平面形は、東西長が 160cm、南北長が 140cm の隅丸方形プランを呈し、床面積は 2.5 ㎡。壁面は、床面から 15cm を残して大きく削平されているが、西壁は内傾してゆっくり立ち上がっており、基本的には袋状の断面形をなすものと考えられる。

ph. 2　調査区北壁土層断面（南から）

また、南壁際には長辺 60cm が、短辺が 30cm、深さが 6cm の楕円形プランの小ピットが掘り込まれている。覆土は、黄褐色ローム粒が混入した暗茶褐色土で、床面上には押し潰された壺や甕が散乱していた。

1は、底径が 9cm の口頸部を欠いた壺で、現高は 26.9cm 頸部と胴部の境に三角凸帯が巡り、凸帯下の肩部には背側に突起を有する貝殻で無軸の羽状文を施文している。羽状文は、軸を挟んで上段に突起のある背側を下に、下段は背側を上にして刻し、左側で交差して羽状に揃えている。この無軸の羽状文を同方向に揃えて上下2段に下から上へ順次施文している。胴部は肩の張った偏球形。外底部がナデ、内底面は指頭による強い押圧ナデ。胴部は、外面が丁寧な研磨状のナデで、内面は粗い押圧痕が残る。胎土は粗く、細～石英砂粒

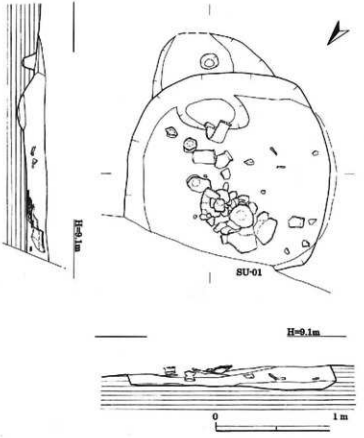
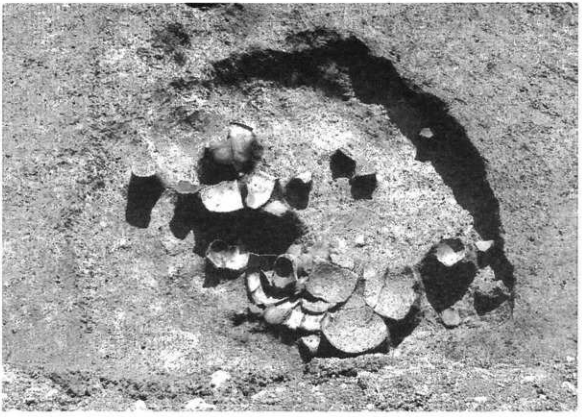


Fig. 5　1号貯蔵穴実測図（1／30）



Ph. 3　1号貯蔵穴（北から）

Ph. 4　1号貯蔵穴遺物出土状況（東から）

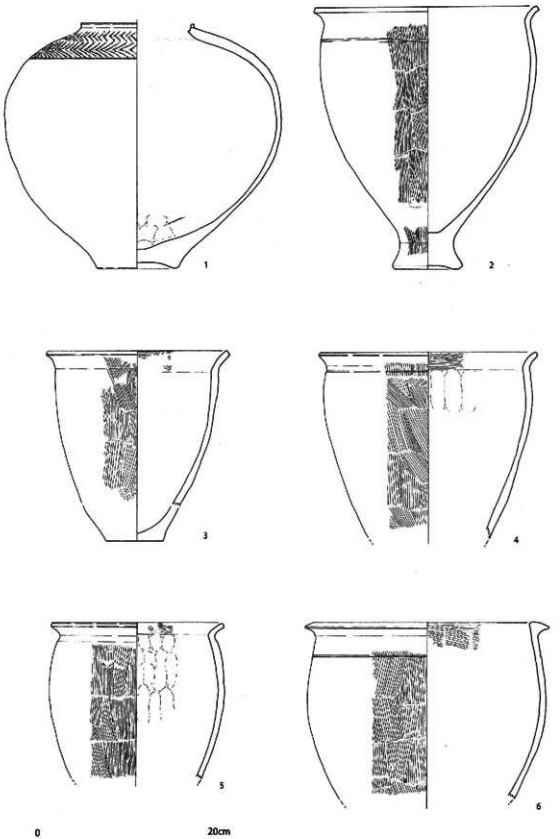


Fig. 6　1号貯蔵穴出土遺物実測図1（1：4）

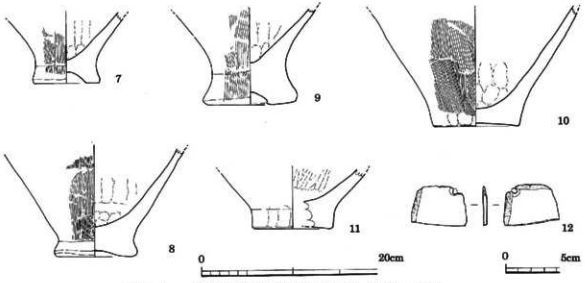
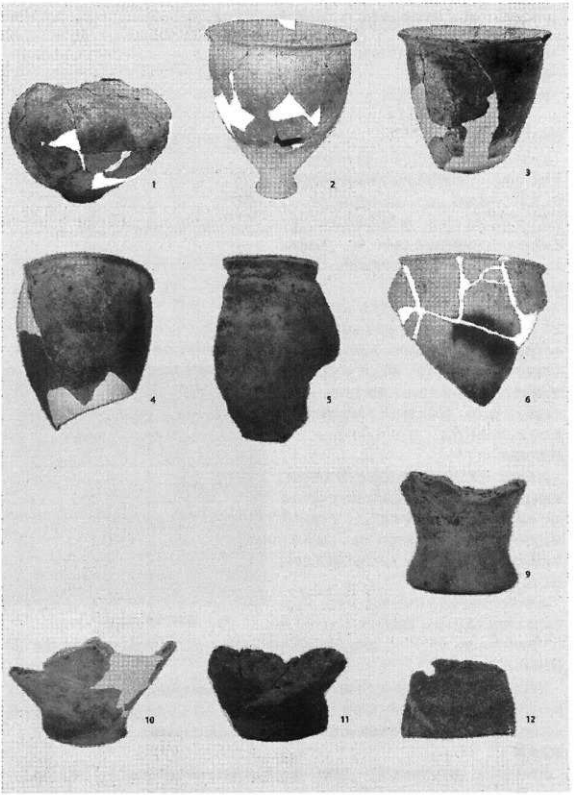


Fig. 7　1号貯蔵穴出土遺物実測図２（1／4・1／3）

と雲母微細粒を多く含み、外面はくすんだ黄～淡明黄橙色、外面は淡黄白色。2～11は、甕。2は口径が24.8cm、底径が7.6cm、器高は28.8cm。口縁部は緩やかに如意状をなする。胴部はやや肩の張った倒卵形で頸部下にはヘラ先工具で横回線を線刻しているが、繁がらず上下に交差している。口縁部がヨコナデ、胴部外面はやや粗いタテハケ目で内面は押圧ナデ。胴部外面の回線下から上半部には煤が、内面の下半部には煮零れ状の炭化物が付着している。胎土は粗く、多くの細～石英小砂粒と雲母微細粒を含む。内外面共に淡明赤橙色。3は口径が20.2cm。口縁部は、短く緩やかに外反し、胴部はわずかに膨んでストレートに窄まる。外面は粗いハケ目。内面は、口縁部がヨコハケ後にヨコナデ、胴部は押圧ナデ。内面には炭化物、外面には煤が付着。粗い胎土には多くの石英小～中砂粒と僅少の雲母微細・赤鉄鉱塊片を含む。4は口径が24cm。口縁部は、如意状に短く外反し、頸部下には浅い横回線が巡る。口縁部外縁がヨコナデ、頸部は粗いタテハケ目、胴部はタテハケ目。内面は口縁部がナデ後にヨコハケ目、胴部は指先による横圧ナデ。胎土は、微細～石英小・中砂粒と僅少の雲母微細・赤鉄鉱塊片を含み、底部には被熱による赤変がある。5は口径が19cmで、口縁部は短く外反し、肩の張った胴部は小さく膨らむ。口縁部外面がヨコナデ、内面は押圧後にヨコハケ目。胴部は外面がやや細かいタテハケ目、内面は指先による強い押圧ナデ。胎土には石英細～小砂粒と若干の雲母微細を含む。6は口径が26.8cm。逆L字状の口縁部は、小さく外傾する。胴部は倒卵形をなし、口縁部下にはシャープな横回線が巡る。口縁部外面はヨコナデ、内面は粗いヨコハケ目。胴部外面は粗いタテハケ目、内面は押圧後に比較的丁寧なナデ。胎土は、細～石英小砂粒と雲母微細を多く含み、明黄橙色。7～11は底部。7～9は上底で、外底から胴部へ向かって内傾気味にストレートな胴部へと繁がる。底径は、7が7cm、8が9cm、9が10.2cm。7・9の外底面は半球状なす。8の内底面には炭化物が付着。胎土は粗く、多くの石英砂粒と雲母微細を含み、8・9には赤鉄鉱塊片も含む。10は底径が9.4cm。粗い胎土は、多量の細～石英粗砂と少量の雲母微細や赤鉄鉱塊片を含む。11は底径が8.8cm。12は、刃部と背を欠く頁岩質の石包丁片で厚さは3.5mm。背側に紐通孔が穿たれている。

3．おわりに

第７３次調査では、弥生時代中期初めの貯蔵穴１基と柱穴を検出した。貯蔵穴は、壊底を残して八女粘土層の上縁まで大きく削平されているが袋状貯蔵穴と考えられる。また、壊底からは圧潰を受けた壺や甕がまとまって検出された。これは、県道505号線の新設に伴う発掘調査結果と同一で、内環壕の南縁から外環壕に至る低台地は、可耕地化による削平が比較的早い時点で行われたと想起される。



Ph. 5　1号貯蔵穴出土遺物（縮尺不明）

報　告

1234　城ノ原遺跡第２次調査（JNH-2）

所 在 地　西区上山門２丁目 1021-1　　調査面積　277 ㎡
調査原因　宅地造成　　担 当 者　杉山富雄
調査期間　2013.2.18 ～ 2.28　　処　置　記録保存

立地と環境

調査地は北へ向かい舌状に張り出す台地地形上に立地している。この地形は早良平野北西縁部で樹枝状に広がる丘陵地の一部で、東の沖積地に向かって突出した先端部に当たる。東・北に崖を成して接する低地との比高は調査面で 4.5 m。対して西面は北東から入り込む谷底に向かって比較的緩い勾配の斜面が続いていたものとみえる。

調査地の現状は、造成されて標高９m程の平坦地となっている。地形図からすると、旧状は標高 10 mの南辺部から北端部へ向かい２mの高度差で緩く傾斜する平坦面であった。明治 35 年発行の陸測部地形図でも、この台地部のみ桑畑であり、周辺の丘陵部とは異なり、利用に適した平坦な地形であったことがうかがわれる。

Fig. 1　調査地点の位置（103 長垂　0508　1：8000）

Ph.1　調査区全景（北から）

調査の経緯

調査地は、一部が埋蔵文化財包蔵地（城ノ原遺跡）範囲に含まれており、埋蔵文化財についての照会を受けた試掘調査により遺構を確認した。その後の開発計画を受けて、事業計画範囲のうち、宅地造成工事による掘削が及ぶ南西部について本発掘調査を実施した。

調査では対象範囲のうち北西部について、トレンチによる確認調査を行い、遺構が分布しないことから、調査区から除外した。一方、遺構が調査区南西部分に偏在したことから進入路部分も拡張して調査を行った。

発掘調査では、厚さ 0.5 mの表土を鋤取り、標高 8.5 mの地山面を調査面とした。これは現状造成時の削平面であり、表土層は削平後の盛土層である。盛土の一部は元の表土層を敷き均している。地山は段丘堆積物、花崗岩岩体風化層かと思われる。調査面に赤褐色土・真砂などが分布する。

調査遺構

調査区内には、攪乱が各所に残る。遺構は、調査区北部中央と南西部に分布する。土壙とするもの１基を除き、柱穴を含む小形円形の遺構である。柱穴には柱痕跡が明瞭に残るものがある。遺構覆土は、類型化でき、全体を地山土で埋めるもの (1)、明褐色土で埋まり、地山土団粒を含むもの (2)、砂質シルトで埋まるもの (3) とに区分できる。覆土１・２は径が大の遺構、覆土３は小の遺構に多くみられた。

土壙7　一辺 0.8 mの隅円方形、深さ 0.2 m。覆土は 1。柱穴の可能性もあるが、柱の痕跡等は確認できなかった。極小量の遺物が出土した。

掘立柱建物 13　調査区南壁際に一部が現れる。柱列２間分を確認したが。柱穴は径・長径 0.5 ～ 0.7 m、深さ 0.1 m～ 0.2 m。覆土は 2、柱穴 6 に柱痕跡が、柱穴 12 に柱圧痕が残る。柱間隔は、1.8 ～ 1.9 m。遺物は柱穴 5 から土器細片、剥片類が、柱穴 6 から土師器極細片、剥片類が極小量出土した。

出土遺物（図 5）

調査では、中型コンテナ 1/3 程の分量が出土した。大部分が表土層から出土した瓦であり、遺構出土遺物は極少数である。表土層出土遺物は、表土鋤取り時採集のものと、調査終了時調査区壁採集のものとがある。遺物は調査区南壁部から多く出土した。

遺構からは、須恵器、土師器、弥生土器が少数、細片で出土した。また、剥片類・石核が出土した。須恵器には、図示する蓋、坏身のほか甕がある。土師器は器形不明、弥生土器は甕細片のみ 1 点が出土した。

瓦は、軒丸瓦が、1 点出土したほかは、すべて平瓦の細片である。

丸瓦 26 は瓦当部。単弁八弁、中房の大部分と周縁を一部欠損するが、蓮子 1 ＋ 8、周縁珠文は 3 × 8 単位の 24、外縁は線鋸歯文という構成とみえる。瓦当面は楕円形状で、長径 13.0cm。胎土は粗砂～細礫を小量含み、軟質で器表橙色、断面芯部は浅黄色。

平瓦 (27・1・28・30)　27 は比較的大きな破片で、側縁の一部が残る。凹面に布目圧痕が残り、一部を箆削り調整する。凸面には縄目叩き目が残る。1 は軟質で、調整不明。器表淡黄色、断面は灰色。目立って厚い。28 の凹凸面はともに撫で調整、凹面に残るのは板状工具痕跡か。器表は暗灰色、断面は灰白色。胎土に細礫を小量含み極堅緻。30 の凹面には長軸方向の撫で調整、凸面には平行叩き目調整の後、撫で調整を行う。堅緻で器表は灰色を呈す。

須恵器 4 は坏蓋細片で、堅緻。柱穴２出土。10 は坏身細片。胎土は堅緻で、稀に細礫を含む。

石核 11 は黒曜石角礫を原材として、礫面を打面とし稜側縁に剥片剥離

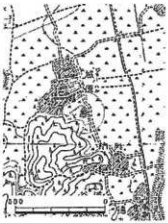


Fig.2　調査区の位置（1:20000　明治 35 年））

Fig.3　城ノ原２次調査区全体図（1：200）

作業面を設けている

終わりに

昭和6(1931)年の玉泉大槳による城ノ原廃寺調査報告では、城ノ原集落の南に接する「鐘撞堂」と呼ばれる舌状台地上の調査を行い、周囲より高く残った墳状の土地で礎石列、その東の位置に塔芯礎を確認するとともに、発掘調査で瓦を得ている。

今回調査中、近辺の複数の方から旧状を聞く機会があった。それによると、調査地を含む一帯が「鐘撞堂」であり、戦後のある時期まで瓦が集められて塚の様になっていたとのことであった。立地の項で触れたように本地点を含む一帯をはずれると、周辺に平坦地はなく、本調査地点を含む一帯の台地面が、「城ノ原廃寺」として調査された土地であると考えられる。

地形図によれば、平坦地は南北70m、東西50m程に限られる。1931年報告中で、礎石の残る墳は西隣地との比高が東より大きいとあることから、台地の西に寄った位置であったと推測できる。しかし、本調査地点の遺構遺存状況から、かなりの程度地山が削平されたものとみられる。南に接する一画も同様とすれば、現在、台地上には深い遺構の一部と、盛土中に残るかつての表土に瓦等の遺物が含まれているのみかと想像される。

参考文献
玉泉大槳 1931「壱岐対馬ノ原廃寺」史跡名勝天然記念物調査報告書第6輯(福岡県、1970復刻)
亀井明徳 1981「12嶋の原廃寺」九州古瓦図録(九州歴史資料館)

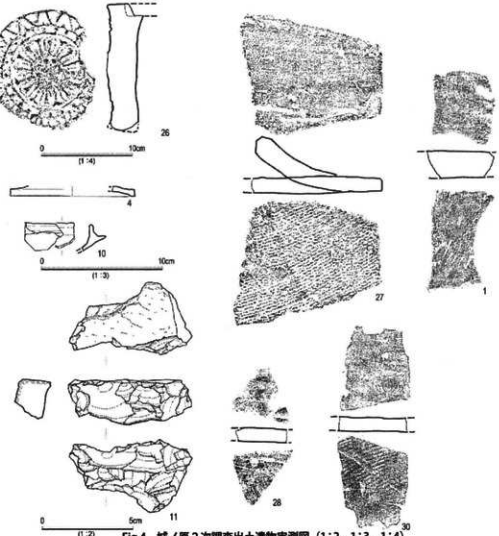


Fig.4　城ノ原2次調査出土遺物実測図（1:2、1:3、1:4）

7418　都地城跡第１次調査（TZE－１）

所 在 地　西区都地　　**調査面積**　200 ㎡
調査原因　宅地造成　　**調査期間**　1975.03.24 ～ 04.08
調査担当　柳田純孝　二宮忠治　　**報告書作成**　山崎龍雄

調査概要

立地と歴史的環境（Fig. 1・2、Ph.1・2）

都地城は室見川西側の標高 30 m前後を測る河岸段丘上に立地する。この台地には西側の長垂・叶岳・飯盛山山塊を源流とする小河川による開析谷が幾筋も入る。この台地上には多くの遺跡が分布する。都地城の北側谷を挟んでは国史跡の吉武高木遺跡、南側には金武城田遺跡・浦江遺跡、西側山麓部には羽根戸古墳群や金武古墳群などの古墳時代後期の群集墳が立地する。また都地城南には日向峠を越えて糸島に通ずる道があり、東側室見川の水運と道の交通の要衝地であった。都地城の北側にある大北遺跡は圃場整備に伴う調査で、弥生時代中期後半・古墳時代前期の遺構と古代後期の遺構が調査されている。都地城周辺の中世・戦国期城館の分布について述べれば西側飯盛山には飯盛山城（高祖城支城）、高祖山の高祖城（原田氏本城）、南側には陣の原城（曲淵氏の出城、浦江遺跡で調査か）、東側では室見側下流に小田部城（安楽平城主小田部氏の里城といわれる）、東側荒平山には安楽平城とその支城茶臼城、菟道岳城がある。東側東入部平地部には平野の開発領主の館跡と思われる清末遺跡がある。

検出遺構（Fig.3 ～ 5、Ph.3 ～ 8）

調査区は都地城の北西隅に位置する。宅地造成に伴って土塁と土塁の外側を巡る堀（溝）、及び土塁下の遺構について調査を行った。調査対象の土塁範囲は約で東西 20 m、南北 28 mを測る。土塁

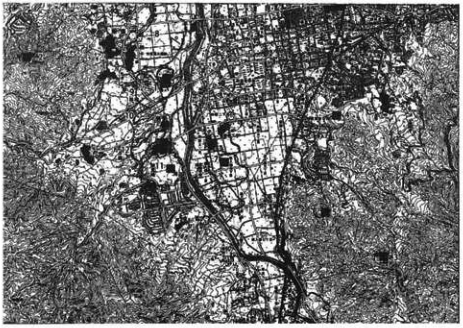


Fig. 1　都地城周辺遺跡と城館（1/50,000）

の規模は調査区では基底部で幅7～8m、高さ1.8～1.9m、堀幅は3～4m、深さ1.3～1.4mを測る。彫り底から土塁頂部までの高さは3.1～3.3mを測る。土塁埋土は暗赤褐色粘質土の基盤上の黒色土（旧表土）上に黒色土、赤褐色の地山土を主体として館内方向に傾斜するように斜め方向に積み上げ土塁を築造する。堀については土色が不明で空堀か水堀かどうかは不明。上塁下暗赤褐色粘質土上面にはピットや土坑などの遺構を確認した。若干のピットから弥生時代・古代・中世にかけての遺物が出土しており、館が築かれる以前も一帯に集落が展開していたことが分かる。

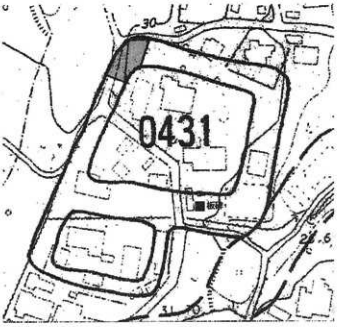


Fig. 2　都地城調査地点位置図

出土遺物（Fig. 6）

土塁・堀（溝）を中心にコンテナ4箱遺物が出土した。弥生時代から近世の遺物である。中世陶磁器の分類については大宰府分類（『大宰府条坊跡XV』2000）を適用する。

1～6は堀内出土。1は白磁碗Ⅷ-3類の口縁部。光沢を持つ透明釉が厚めにかかり、灰白色を呈す。2は越州窯系青磁の鉢の底部か。オリーブ灰色釉の施釉で外底畳付に粘土目痕が残る。3・4は土師器椀底部。いずれも1/6片で、復元高台径8.4cm・8.0cmを測る。遺存は悪く調整は不明。4は内面黒褐色を呈し、黒色土器の可能性がある。5・6は中期須恵式Ⅰ式期の弥生土器甕口縁部。1/3片・1/6片で、復元口径26.6cm、29.0cmを測る。いずれも調整は不明だが、内外面黒斑があり、5の胎土は精良で、色調から二次的に被熱した状況を示す。7～11は土塁下部土層出土。7～11は白磁。7～9は碗。7はV-2a類の口縁部1/8片

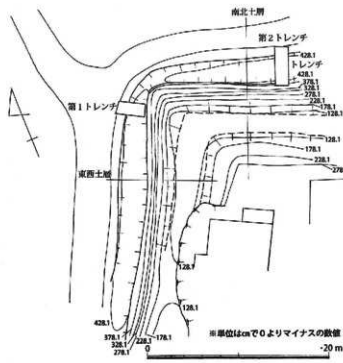


Fig. 3　調査区現況測量図（1/400）

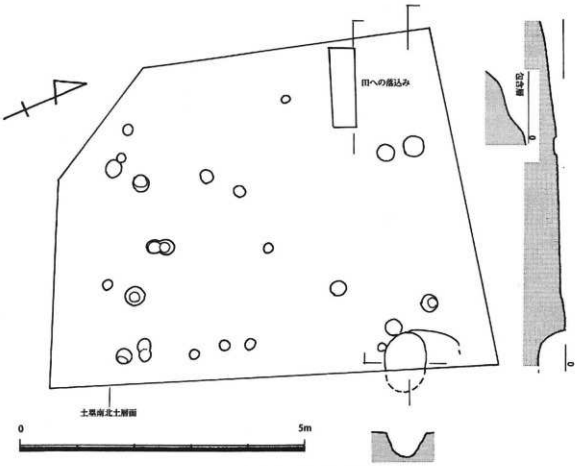


Fig. 4　土壙下遺構検出図（1/60）

で、復元口径 17.2 ㎝を測る。外底部近くはケズリで露胎。オリーブ灰色の釉が厚めにかかる。8 は Ⅷ-3 類口縁部 1/3 片。復元口径 17.0 ㎝を測る。外底近くは露胎。見込みに 1 条沈線が巡る。光沢を持つ透明釉が厚めにかかり、色調は灰白色を呈す。9 は V 類の底部。高台はケズリで露胎。見込み輪状に重ね焼き痕が残る。10・11 は皿。10 は Ⅲ 類か。1/6 片で復元口径 12.6 ㎝、器高 3.0 ㎝を測る。外底部はケズリで露胎、見込みは輪状に釉を掻き取る。11 は IX-3 類 1/6 片で、復元口径 13.6 ㎝を測る。体外部下半は露胎。13 世紀後半～ 14 世紀前半に増加する形態である。12 は SP05 出土の中世の土師器皿底部細片。摩滅し調整は不明。13～18・20～22 は出土地不明。13 は黒色土器 A 類（内黒）椀底部 1/3 片。復元高台径は 8.4 ㎝を測る。摩滅し調整は不明。10 ～ 11 世紀のもの。14 は須恵器坏 1/4 片。復元口径 13.8 ㎝、器高 3.4 ㎝を測る。8 世紀前半のもの。15・16 は江戸期の国産染付磁器。15 は皿底部 1/6 片。復元高台径 8.2 ㎝。16 は小碗底部片。復元底径 3.8 ㎝を測る。17 は褐釉陶器の壺底部。18 は鍋底部小片。外面粗いタテ刷毛目。内面は表面が荒れ不明。19 は中世須恵器甕口縁部 1/4 片。復元口径 27.6 ㎝を測る。胴外面平行叩き後ヨコカキメ。内面同心円状の当て具痕、口縁部外面平行叩き後ヨコナデ消し、内面ヨコナデで自然釉がかかる。調査区ではなく北隣接地畑で採集か。20 は弥生時代中期須玖 II 式期の蓋頂部 1/6 片。21 は石包丁 1/2 片。残存長 9.0 ㎝、幅 3.7 ㎝を測る。石材は泥岩。22 は玄武岩製の今山産蛤刃の磨製石斧。残存長 14.7 ㎝を測る。刃部は欠損する。

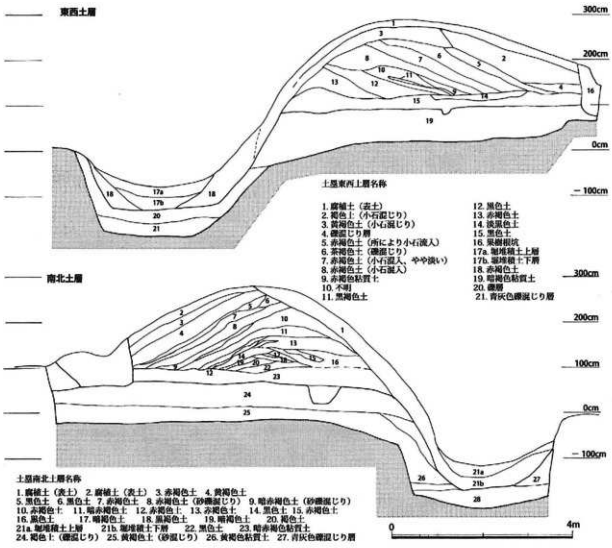


Fig. 5　土塁東西・南北土層図（1/80）

まとめ（Fig. 7）

出土遺物から見た館の時期は土塁下層出土の白磁 11 が 13 世紀後半～ 14 世紀前半頃に盛行するものであり、その時期以降の築城と推定する。溝内から戦国期に該当する遺物の出土はないが、恐らく館の時期の堀は埋没しないように絶えず手が加えられており、遺物が残らなかったのか、この区域が館での生活の場でなかったのかも知れない。都地城の規模について述べれば、筆者のその後の現地調査の成果から規模を推定すると図面上での計測であるが、北側と南側に大小 2 か所の四方を土塁で囲まれた複郭の城館である。土塁外周には堀が巡る。北郭は土塁内で東辺 55 m、西辺 75 m、南辺 82 m、北辺 70 mを測る。南郭は北側より小さく東辺 45 m、西辺 30 m、南辺は 53 m、北辺 55 mを測る。地元での聞き取りによれば、館部分は「後都地」、その東側は「前都地」と言われこの部分に矢倉があったという。近くの室見川に架かる橋が矢倉橋と言われる。「前都地」東側は段丘崖面で室見川の自然の要害となる。館内と前都地民地内に石組井戸が各 1 か所と石塔類を寄せた場所もある。本来の都地城は土塁が残る複郭の部分に領主、東側「前都地」にその一族が住む地区で、両方

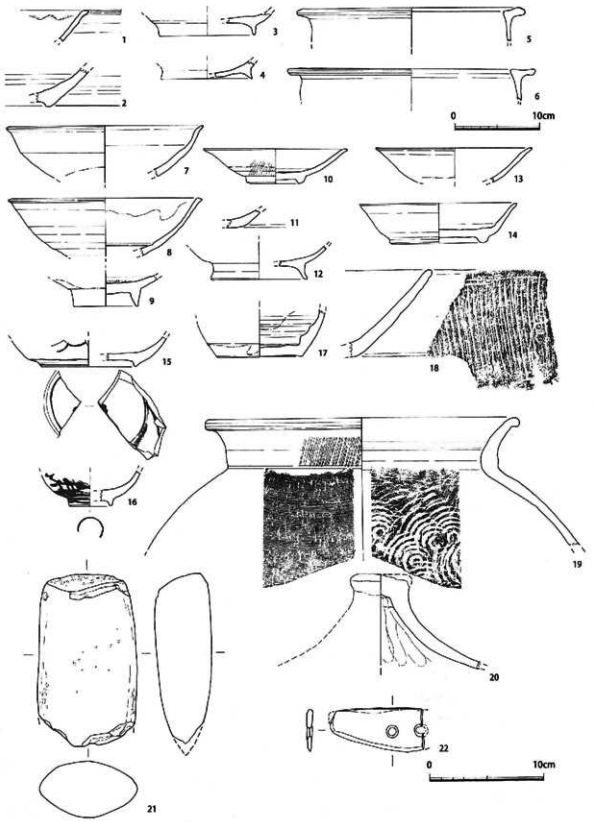


Fig. 6　各遺構出土遺物（1/ 3・1/ 4）

Ph. 1　都地城遠景（上空　南から）

Ph. 2　調査区遠景（上空　西から）

Ph. 3　調査区遠景（北から）

Ph. 4　都地城北郭東側（南から）

Ph. 5　調査区南北土塁状況（北から）

Ph. 6　北側土塁土層断面（東から）

Ph. 7　同北溝（堀）土層断面

Ph. 8　土塁下遺構検出状況（東から）

合わせて都地城であった可能性がある。

都地城については、江戸時代の編纂資料には記述がなく、明治時代に作成された『福岡県地理全誌』に「都地若狭守宅址」という項目で記録されている位で、だれが領主であったかは不明である。地元の伝承では細川五位尚蔵人光行の城であるといわれ、地元在住の子孫の方がまとめられた『細川家縁起録』によれば、「細川家の先祖は代々京の北面武将として院の御所を守護していたが、後奈良天皇の御代、九州に反乱が多数するため将軍の命によりその鎮圧のために下向した。天文元年（1532）光行21才の時で、光行は当地に城を構え、所領350町を拝領し、郡中を守護する任についた。永禄元年（1558）光行は地元の豪族小田部氏と戦い47才で最後を遂げた」という。伝承の真偽はともかく当地に城館を構えた領主がおり、安楽平城主小田部氏とは敵対関係にあったようである。戦国時代末には原田氏方の飯盛山城とともに都地城もその支配下に入っていたと考える。

本報告は38年前の都地城の発掘調査の成果を報告したものである。当時は新聞記事になったほどの調査であったが、諸般の事情で発表の場がなかった。担当者は既に現役ではないが、市内に残る数少ない中世城館の調査事例であるため、今回筆者が代わりに報告するものである。遺構の記録報告などは原図を尊重したが、筆者の力不足で誤りがあることを危惧する。それについてはご容赦願いたい。

引用・参考文献　『福岡県史　近代資料編　福岡県地理全誌（6）』
石津司『安楽平城物語』その2
福岡県の城郭刊行会（2009）『福岡県の城郭』

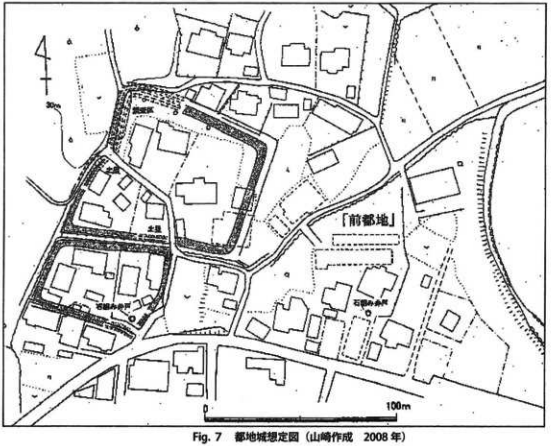


Fig. 7　都地城想定図（山崎作成　2008年）

7915　有田遺跡群第 20 次（ART-20）

所 在 地　早良区有田 1 丁目 14-20　　**調査面積**　250 ㎡
調査原因　住宅建設　　**担 当 者**　柳田純孝、二宮忠治、山崎龍雄（報告作成）
調査期間　1979.7.3　　**処　　置**　記録保存

位置・環境（Fig. 1）　調査地は最大標高 15 mを測る有田・小田部台地中央部やや南側に位置する。調査地一帯は台地では一番広い平坦面を持つ地区で、弥生時代から古墳時代集落、古代の官衙遺構、戦国期の小田部城塁跡など各時代遺構が多数集中する。調査地の標高は 13 mを測る。

検出遺構（Fig. 2）　調査区は試掘で遺構が確認された西側部分に設定した。土層は 43 cmの盛土、12 cmの茶褐色粘質土で、その下が遺構面の灰白色粘質土である。検出した遺構は東西方向の溝 1 条と掘立柱建物 1 棟。溝は幅 70 ～ 90 cm、深さ 20 ～ 30 cmを測る。溝断面は逆台形で、埋土は暗褐色粘質土である。中から弥生土器片が 1 点出土した。掘立柱建物は 1 × 1 間の建物で、柱間は 240 cm、270 cmを測る。竪穴住居の主柱穴の可能性もある。

出土遺物　所在は不明だが、試掘報告の所見では極めて少ない。

まとめ　遺構面は灰白色という土色から八女粘土と思われ、遺構面はかなり削平されていると考える。

Fig. 1　調査地区の位置（082 原 0309　1：8000）

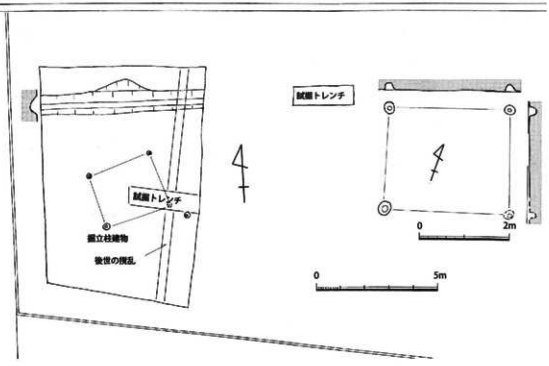


Fig. 2　調査区遺構全体図と建物（1：150・1：80）

8328　那珂遺跡群第５次調査 (NAK- ５)

所 在 地　福岡市博多区那珂１丁目 377-3　**調査面積**　100 ㎡
調査原因　ビル建設　　**担 当 者**　下村　智・横山邦継
調査期間　1983.6.20~ 7.03　　**処　　置**　記録保存

１．位置と環境　(Fig.1・3)

本調査地点は、福岡平野の中央部を南北に延びる那珂丘陵の北東側にあたる。標高は 8m 前後を測る。東側は緩い谷となって下降する。これまでの周辺調査では北側に第 39 次、南側に第 40 次があり、北西側には第 72 次地点が知られる。第 40 次では弥生中期末～古墳後期の竪穴式住居跡６軒、古墳後期掘立柱建物７棟、弥生中期・古墳後期の土坑６基、弥生中期後半貯蔵穴１基、中世期木棺墓１基、古墳後期・13C 前半期・15 ～ 16C 溝４条など弥生中期末～中世期までの遺構が濃厚である。また 39 次では弥生前期後半貯蔵穴１基、弥生中期前半甕棺墓３基、古墳前期溝１条、中世期溝１条、12C 後半井戸跡１基、13C 後半～ 14C 前半の土壙墓１基、土坑（地下式土坑か）1 基などが検出されており、弥生前期後半～中世末期までの遺構が見つかっている。更に 74 次では全体に中世以降の削平が著しい南西側では溝２条が検出され、この他の部分では弥生時代中期頃に埋没した谷部の包含層上から掘りこまれた弥生後期～古代・中世期の井戸９基が検出された。

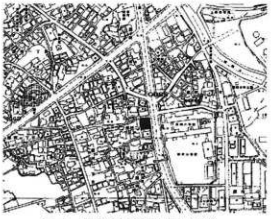


Fig. 1　調査地点の位置（1：8000）

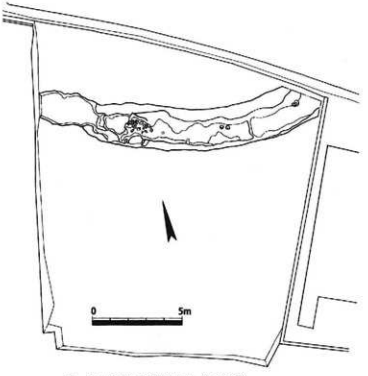


Fig. 2　調査区遺構全体図（1：200）

２．検出遺構　(Fig.2・4・5・6)

本調査はビル建設に伴う切り下げ工事の時点で市民からの通報を受け、工事を中断させて調査に着手し、清掃の結果溝１条を検出した。溝はほぼ東西に緩い円弧を描き、延長 15.35m・幅は西端で 1.4m、東側に従い 2.4m 前後の均一な幅員となる。また深さは 0.7m 前後である。円形であれば内径 26m、外径 32m 程度の規模か。溝内の傾斜は北側で緩く、南側で急に立ちあがる。溝底面は西端部より約 3m で段をもって下がり、不整な長方形状をなす。この中に中型甕・小型丸底壺・マリ等の古式土師器が多く見つかった。溝埋土は、Ⅰ層（黒色土層－主に弥生中期後半の遺物を多量に含み、他に夜臼・板付Ⅰ式土器片を混じる）、Ⅱａ層（暗黄褐色土層－やや黒味を帯

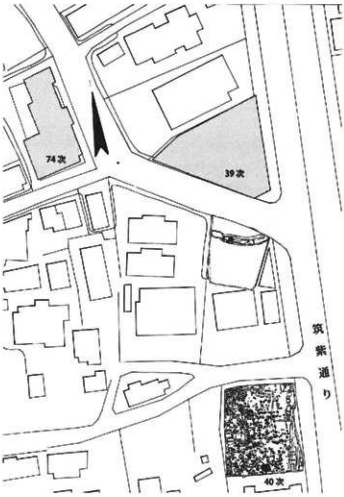


Fig. 3　調査区周辺図（1：4000）

びるがⅡb層と土質の変化は無い。弥生式土器を含む）、Ⅱb層（暗黄褐色土層ー溝の主要な埋土で、細かい地山の粒子や炭化物を含み、古式土師器を多く包含する）、Ⅲ層（褐色粘質土層ー褐色粘土と地山の黄白色土との混在になる。遺物は少ない）、Ⅳ層（黄白色粘質土ー地山で八女粘土層）となっている。

3．出土遺物（Fig.7～9）

00001は口縁が直線的に外開する土師器甕である。調整は不明である。器色は淡黄白色。胎土は密。焼成堅緻。口径14cm。00002も口縁が内傾気味の土師器甕である。器面は磨滅する。器色は外面淡黄灰色・内面暗灰褐色。器壁は3～5mmと薄い。胎土は密。焼成堅緻。口径15.8cm。00003も内弯気味の口縁の土師器甕である。胴部に細かい横タタキを施す。口縁内は横ナデ、胴部は斜めヘラ削り。器壁は2mmと非常に薄い。器色は淡褐色。胎土は密。焼成堅緻。口径13.8cm。00004も土師器小型甕である。胴部外面に荒い横タタキ。口縁部内外は横ナデ。胴部内面はヘラ削りか。器色は外面淡赤褐色～暗褐色・内面褐色。胎土はやや粗。焼成軟質。口径12.4cm。00005は内弯気味の短い口縁の土師器甕である。外面胴部に荒い横・斜めタタキを施す。頸部・口縁は横ナデ。口縁内面は斜めハケ後に横ナデ。胴部は縦方向のヘラケズリ後に斜めハケを加える。器色は外面暗褐色で、一部に煤付着。内面は赤褐色。胎土は粗で、石英粗砂を多く混入。焼成堅緻。口径9.2cm。00006は内弯気味の口縁に球状胴の土師器甕である。器壁は非常に薄く、1mm程度である。口縁部内外面が横ナデで、外面胴部は頸部下に単位4本の波状文を巡らし、これ以下では帯状に細かい横ハケを施す。内面胴部は斜め方向のヘラ削りが残る。器色は淡褐色で、外面下部に黒斑がある。胎土は密で、石英粗砂を少量混じる。焼成堅緻。口径15.4cm・残存高11.5cm。00007は薄手の土師器二重口縁壺である。器面の荒れが著しい。器色は外面淡黄白色で、内面淡灰褐色。胎土は密で、焼成軟質。00008は口縁が朝顔状に大きく開く土師器二重口縁壺で、器面の磨滅が著しい。器色は淡赤褐色。焼成はやや軟質。口径18.6cm。00009も土師器二重口縁壺である。屈折部が垂れ突帯状となり、その上部に2個単位の竹管文(径0.8～1cm)を施す。器面の磨滅が著しい。器色は外面淡い黄橙色・内面淡橙色。胎土は非常に密。焼成軟質。00010は小型の不安定な底部の土師器甕である。外底部はやや窪む。外面胴部で荒い縦ハケ後に荒い斜め・横方向のタタキを施し、底部は同心円状に荒いタタキをかける。また内面は斜めのハケ目で、内底部に指オサエが残る。器色は外面暗赤褐

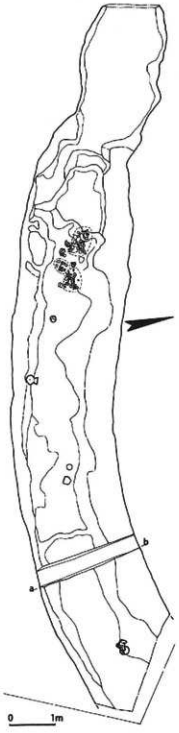


Fig. 4　SD001 溝出土状況実測図（1：80）

色・内面淡褐色。胎土は粗。焼成軟質。00011は尖底の甕底部である。内面に指オサエが残る。器色は外面赤褐色・内面淡赤褐色。胎土に石英砂の混入多く、焼成堅緻。00012は土師器小型丸底壺である。頸の締まりが弱い。外面胴部に細かい縦ハケ後に横横ヘラナデを施す。器色は外面暗赤褐～淡赤褐色・内面暗赤褐色。胎土は密で、焼成堅緻。口径14cm。00013は土師器高坏である。薄造りで、脚部を欠く。坏部の口縁と底部の境は段をなす。外面に細かいナナメハケ目。器色は外面赤褐色で、内面暗赤褐色。胎土は密。焼成軟質。口径19.8cm。00014は土師器小型器台である。坏部は浅い。脚への移行部に細かいヘラ削りが残る。器色は外面赤褐色で、内面暗褐色。口径9cm。00015も土師器小型器台の脚部である。上部に外側からの二次穿孔がある。器色は赤褐色である。胎土は密。焼成堅緻。脚径9.8cm。00016は土師器高坏である。脚部内面にヘラ削りを施す。器色は淡褐色～淡黄褐色を呈する。胎土は密。焼成堅緻。00017も土師器高坏である。坏部と脚部端を失う。外面の脚上端に横ナデを施す脚部は下部方向のヘラナデ。内面はヘラ削りが残る。器色は暗赤褐色。胎土は密。焼成堅緻。00018～00022は夜臼式甕である。00020を除けば何れも口縁が内傾して胴部が「く」字形に屈曲するタイプの甕である。器面の磨滅が著しい。外面が条痕文、内面横ナデ。器色は暗褐色～暗赤褐色。胎土は粗。焼成軟質。00023は板付Ⅱ式土器鉢である。口唇部下端に刻目を施す。器面は荒れている。両面ともに荒いハケ目か。器色は外面暗褐色・内面淡褐色。胎土は粗。焼成軟質。00024は弥生式土器甕把手か。両側より摘み上げたように断面三角形をなす。器色は外面淡黄褐色・内面黒灰色。胎土は粗。焼成軟質。00025は短い鋤先口縁の弥生中期壺である。器面の磨滅が著しい。器色は淡赤褐色。外面胴部には黒色顔料の痕跡がある。胎土は密。焼成堅緻。00026及び00027は弥生式土器壺の胴部である。何れも平行沈線の後に縦沈線を引く。磨滅が著しい。器色は暗褐～褐色。胎土は何れも密。焼成堅緻。00028は口縁が大きく外方に開く弥生中期広口壺か。外面縦ハケ後横ナデで、内面はヘラナデか。器色は淡赤褐色で、内面は黒斑。胎土は密。焼成堅緻。口径23.6cm。00029は端部が肥厚する口縁の中期壺である。器面の磨滅が著しい。内面

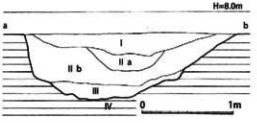


Fig. 5　SD001 溝土層断面図（1：40）

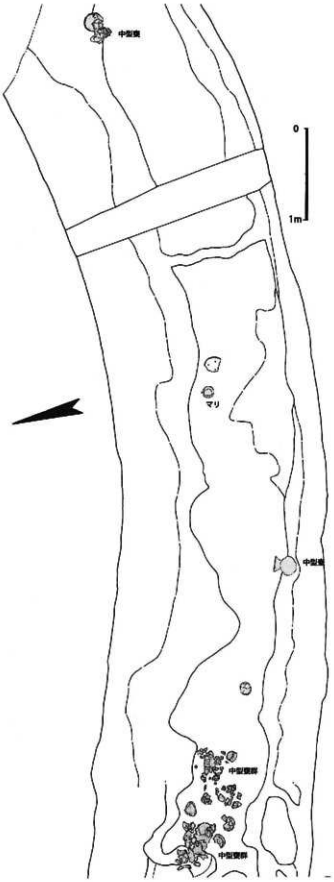


Fig. 6　SD001 土師器出土状況（1：40）

は横ナデ。器色は淡褐色。胎土は密。焼成堅緻。口径23.2cm。00030は平坦口縁をもつ中期丹塗り甕である。口縁下に低い「M」字形突帯1条を巡らす。また口唇部に2.5～5mm間隔で縦方向に刻目を施す。胎土は密。焼成堅緻。00031も中期丹塗り甕である。口唇部に荒い刻目を施す。造りは粗雑である。内面にヘラナデが残る。器色は淡赤褐色。胎土は密。焼成堅緻。00032は断面が「L」字形の短い口縁をもつ中期甕である。外面胴部が縦ハケ後に横ナデか。器色は淡褐～淡赤褐色。胎土は密。焼成堅緻。口径31cm。00033は内面への張り出しが強い平坦口縁の中期大型甕破片である。口縁部上端にハケ目か。内面はヘラによるヨコナデ。器色は淡赤褐色。胎土はやや砂質で密。焼成堅緻。00034は00033と同様に内面への張り出しの強い平坦口縁の中期大型甕である。甕棺の可能性がある。内外面ともに横ナデである。器色は暗赤褐色。胎土には石英砂を多く含み、やや粗。焼成堅緻。00035は中期大型壺である。厚手の造りで、上部に高い三角突帯1条を巡らす。部位により強弱をつけたヨコナデ。器色は暗褐色。胎土はやや粗。焼成堅緻。00036は口縁が鋤先状と考えられる中期壺である。頸部に三角突帯1条を巡らす。内面頸部は稜をなす。器色は赤橙色。胎土は石英・長石砂の混入し密。焼成堅緻。突帯部径31.2cm。00037は中期丹塗り高坏の脚部である。円筒部外面は縦方向の丁寧なヘラミガキ、内面に絞り。器色は淡赤褐色。胎土は非常に密。焼成堅緻。脚上端部径4.8cm。00038も中期高坏の脚部である。円筒部は殆んど中実である。内外面ともに淡黄褐色。胎土は砂質で密。焼成堅緻。脚上端部径5.6cm。00039は蓋形土器の頭部である。器面の荒れが著し

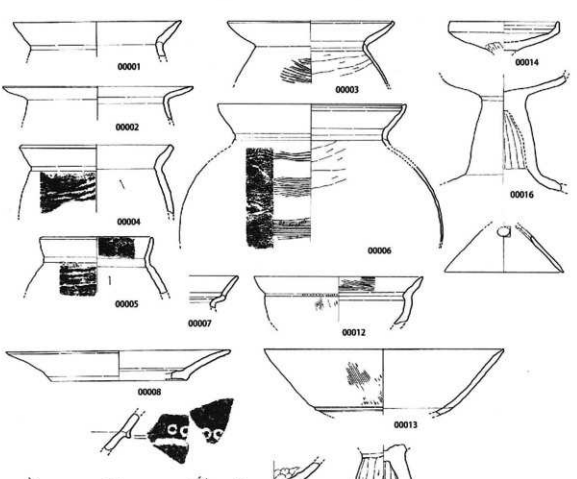


Fig. 7　SD001 溝出土土器実測図（1）（1：3）

いが、外面に一部荒い縦ハケが残る。また内面上部には指ナデ・オサエが顕著である。器色は淡黄褐色。胎土は粗。焼成はやや軟質。頭部径6.25cm。00040も端部を失う蓋形土器である。頭部は窪み、造りは精良である。外面体部には縦のヘラナデ・内面は体部ハケ目後に指ナデ・オサエを施し、頭部は横ナデ。器色は外面暗褐色、内面暗赤褐色、頭部外面は黒褐色。胎土はやや粗。焼成堅緻。頭部径6.6cm・残存高11.1cm。00041は高坏脚部である。坏部内面にナデが残る。器面が荒れている。器色は外面が暗黄褐色で、内面淡赤褐色。胎土はやや粗。焼成軟質。脚部径5.4cm。00042は中期器台である。頭部を失う。器面の磨滅が著しい。内面に絞りが残り、この後にナデを施す。器色は外面赤褐色・内面淡赤褐色。胎土は密。焼成堅緻。脚部径10cm。00043は中期土器器台の頭部である。外面に荒いハケ目を施す。器色は外面暗黄褐色・内面淡黄褐色。胎土はやや粗。焼成堅緻。口径9.8cm。00044はやや上げ底の弥生前期小型壺である。底部端は円盤状とならない。器色は外面暗赤褐色・内面淡赤褐色。胎土は密。焼成軟質。底部径3cm。00045は弥生中期甕底部である。外面に荒い縦ハケ目が残る。底部に外側からの二次穿孔が見られる。器色は外面暗赤褐色・内面黒褐色。胎土は砂質で密。焼成堅緻。00046も弥生前期甕底部である。外面上部横ナデで、下端部にヘラナデを施す。底部付近は指オサエ後にナデを加える。胎土に石英・長石粗砂を多く混入。焼成堅緻。

00047は弥生前期壺底部である。外面は荒い縦ハケで、内底部は指オサエが残る。なお外底部には籾圧痕が多数見られる。器色は外面淡褐～淡灰褐色・内面淡赤褐色。胎土は粗。焼成軟質。底部径9.4cm。00048も弥生中期壺底部である。外面斜めのヘラナデか。内底部に指オサエが残る。胎土は

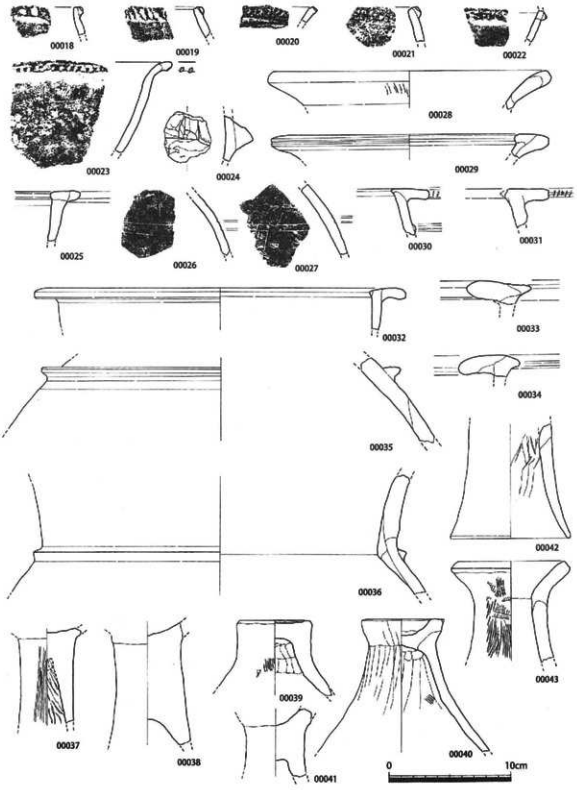


Fig. 8　SD001 溝出土土器実測図（2）（1：3）

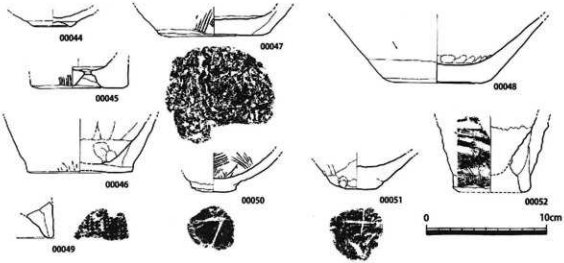


Fig. 9　SD001 溝出土土器実測図（3）（1：3）

粗。焼成堅緻。底部径7.4cm。00049は甕形土器底部か。上げ底で、外面に荒い格子タタキ。器色は外面淡黄褐色・内面暗褐色。胎土には石英砂の混入多く、焼成堅緻。00050はいびつな壺底部。不安定な平底をなし、不明圧痕がある。外面は荒い斜めハケ。内面はハケ目工具でなで回している。器色は外面黒斑・内面赤褐色。胎土は粗。焼成軟質。底部径3.7cm。00051も不安定平底をもつ壺底部である。外面に指ナデ痕が残る。外底部には不明圧痕がある。器色は外面淡赤褐色・内底は暗灰～黒灰色。焼成堅緻。底部径3.4cm。00052は不安定な平底の甕である。器面の調整は粗雑で、外面に非常に荒い斜めタタキを施す。内面は指でなで上げる。器色は暗灰褐色を呈する。胎土は粗。焼成堅緻。底部径6.6cm。

4．まとめ　本調査地点では既述の様に開発が先行した結果遺構群はその殆んどが失われていた。調査された溝1条は古墳時代前期の墳墓の可能性がある。埋土中の土器類からはこの周辺が弥生早期・前期～後期までの長い期間を通じ、この那珂遺跡群の集落として存続したことを示している。

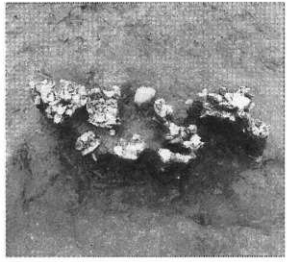
Ph. 1　調査地現況（調査前、北から）

Ph. 2　調査状況（西から）

Ph. 3　SD001 溝完掘状況（西から）

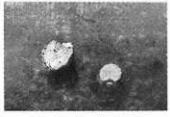
Ph. 4　SD001 溝完掘状況（西から）

Ph. 5　SD001 東壁土層断面（東から）



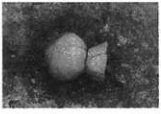
Ph. 6　SD001 溝内
土師器出土状況（南から）

Ph. 9　土師器出土状況



Ph.10　土師器出土状況

Ph. 7　SD001 溝内
土師器出土状況（北西から）



Ph.11　土師器出土状況

Ph.12　土師器出土状況

Ph. 8　SD001 溝内
土師器出土状況（西から）

8982　那珂遺跡群第 24 次調査 (NAK-24)

所 在 地　福岡市博多区那珂 1 丁目 590-2
調査原因　共同住宅建設
調査期間　1989.9.18~9.20
調査面積　３５２㎡
担 当 者　横山邦継
処　　置　記録保存

1．位置・環境 (Fig.1・3)

本調査地点は、福岡平野中央部を南北に延びる那珂丘陵の北東部にあたり、海抜標高は 7 m前後をはかる。周辺では本地点の南側の第 69 次地点及び西側に隣接する第 8 次地点で共同住宅建設に伴うまとまった調査が行われている。第 8 次では弥生中期後半～中世期までの遺構が密度濃く分布する。主なものは弥生中期後半・古墳前期・同後期の竪穴式住居跡 21 軒、弥生中期後半掘立柱建物 6 棟 (1 × 1・1 × 2・2 × 3 間規模) 、弥生中期後半・6 世紀末・8 世紀後半～ 9 世紀初の井戸跡 4 基、弥生中期末・古墳後期の土坑 13 基、7 世紀後半～ 8 世紀初・13 世紀の溝遺構 10 条、ピット群多数が検出された。出土遺物の中では青銅器鋳造にかかる取鍋や中子などが特徴的である。また第 69 次でも弥生中期後半～中世期までの遺構が広く検出された。弥生中期後半～末では竪穴住居跡 2 軒、掘立柱建物 8 棟 (1 × 2 間規模)・井戸跡 2 基がセットとされる。また弥生後期中葉～後葉・古墳前期竪穴住居跡 6 軒があり、後期中葉の住居跡からは破鏡となった内行花文鏡 1 面が出土した。また古墳後期には竪穴住居跡が 15 軒と増加するとされる。他に溝 6 条、土坑・ピット群があり、古代～中世期までの時期に及んでおり、両地点の遺構推移は殆んど共通的である。

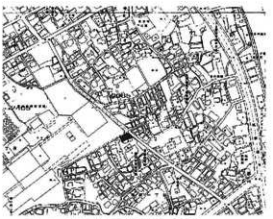


Fig. 1　調査地点の位置 (1：8000)

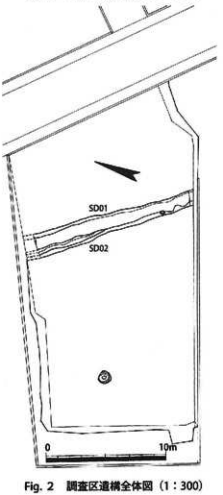


Fig. 2　調査区遺構全体図 (1：300)

2．検出遺構 (Fig.2)

本調査地点は、共同住宅建設に伴う事前工事が先行していたが、市民通報により工事を中断させた。対象地はそれまでに既に全体に広く削平を受けており、以下に記すように検出できた遺構は井戸跡 1 基・溝遺構 1 条のみであった。

① 井戸跡 (Fig.2・4)　調査区西側で検出した SE001 井戸跡は、径 1.4 mの円形素掘り井戸で、深さ 2.52

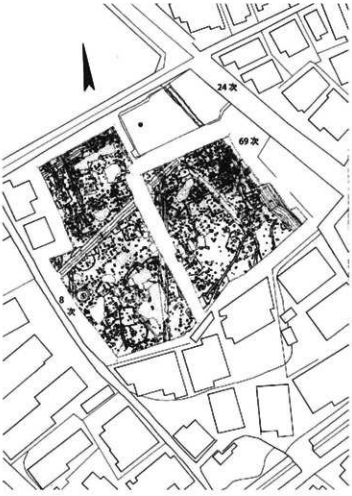


Fig. 3　調査区周辺（1：2000　）

mを残す。井戸壁は下部は安定した漏斗状となるが、上部は湧水による崩落を含めて凹凸が多い。また壁地山の層位は、上端部から約 0.7 mまでが黄～黄褐色粘質土（鳥栖ローム下部）、更に下部 2 mまでが黄白色粘質土で、これ以下 2.5 mまでが淡灰白色粘質土（八女粘土）となる。

次に井戸内の埋土は黒～黒灰色粘質土であり、これらは遺物を含む層位から大きく上層とそれ以下の下層・最下層とに区別される。上層では口縁断面が「く」字をなす甕類や丹塗りの高坏・袋状口縁壺・甕形土器などが出土した。また下層では丹塗り袋状口縁壺、鉢形土器、器台があり、下層の最下部では釣瓶形土器・丹塗り袋状口縁壺・口縁断面が「く」字形をなし口縁下に低い三角突帯を巡らす大型甕などが出土している。

② 溝遺構 (Fig.2・7)　調査区東側寄りで検出した北西から南東方向に走る小溝である。方位は N－36.5°－W を示す。延長は 14.5 m以上・幅 1.2～2 m・深さ 0.42～0.57 mをはかる。本溝は、土層の断面観察から北側部分で西壁が新しく掘り直されたものと判断できる。溝検出面の地山は赤褐色ローム層である。また溝の埋土は新しい溝では 1 層（灰茶褐色粘質土、若干の炭を含む）・2 層（灰茶褐色粘質土、粘質が強い）・3 層（茶褐色粘質土、茶色・黄色の粒子を含みやや砂質）・4 層（灰茶褐色粘質土、1・2 に比べ粘質度が非常に強い）であり、一方の古い溝では 5 層（赤茶褐色、地山のブロック混）・6 層（赤茶褐色土、締まりがなく下部に炭を含む）・7 層（灰褐色粘質土、黄褐色のブロックを含む）・8 層（灰茶褐色土、やや紫を帯び締まりが無い）・9 層（淡灰茶褐色土、粘質があるが砂質土を含む）・10 層（灰茶褐色土、黄褐色ブロック・炭を含む）・11 層（淡灰褐色粘質土、粘質が非常に強い）・12 層（灰茶褐色土、締まりが無く、黄色の微細ブロックを含む）・13 層（灰褐色粘質土、粘質強く、黄色の微細ブロック含む）となる。埋土中からは白磁碗、瓦質土器鉢・火舎、須恵器甕・高台坏・坏蓋、土師器ハソウ、砥石等が出土した。

3．出土遺物　(Fig.5・6・8、Ph.1)

本地点では井戸 1 基・溝 1 条から合せてパンケース 3 箱分の遺物が出土した。以下、図化できたものについて説明を加える。

SE001 井戸 (Fig.5・6・Ph.1)　まず上層出土遺物について記す。00001 は、口縁が「く」字形に折れる甕口縁部破片である。調整は口縁内外面ヨコナデ、胴部外面に荒いタテハケ目、内面ヨコヘラナ

デを施す。器色は淡赤褐色を呈する。胎土に砂粒多く、焼成堅緻である。00002も同様の甕破片である。胴部外面はタテハケ目後にヨコナデで、内面は工具によるヨコナデを施す。気色は暗褐色を呈する。00003も同様の甕であり、やや肉厚な造りである。口唇部に一条沈線を施す。口縁部内外面は丹塗りである。00004は短い平坦口縁をもつ小型甕である。胴部がやや膨らみ、古式である。調整はヨコナデで、内面胴部は上部指オサエ・下部をヘラナデか。器色は淡赤褐色～淡褐色を呈する。胎土は石英砂の混入が多く、焼成は堅緻である。復元口径17.2cmを測る。00005は断面L字形の平坦口縁をもつ甕破片である。1/8残存。調整は内外面ともにヨコナデで、口縁上端部はヨコハケ後にヨコナデを施す。器色は内外面ともに淡黄褐色を呈する。胎土は石英砂の混入が多く密である。焼成堅緻。口径29.2cmを測る。00006は口縁断面が「く」字形に折れる中型甕である。調整は口縁及び胴部内に指オサエ・ヨコナデ、胴部外面には細かいタテハケ目を施す。外面口縁・胴部には煤が付着する。器色は外面が淡褐～暗褐色で、内面は赤褐色を呈する。胎土は石英砂・赤色粒を多く含み、密である。焼成堅緻。口径25.6cm・残存高16.1cmを測る。00007は甕底部である。調整は外面に細かいタテハケ目、内底部に指オサエが残る。内面は磨滅が著しく、一部に焼け焦げが残る。器色は外面淡赤褐色、内面暗褐色を呈する。胎土はやや粗で、石英砂・赤色粒の混入が多い。底部径7cmを測る。00008は高坏破片である。坏・脚部の大半を失う。また器面の剥落も顕著である。内外面ともに丹塗り。脚部内面に絞りが残る。胎土は密で、焼成も堅緻である。脚径5cmを測る。00009は丹塗り袋状口縁壺である。口縁下に鈍い三角突帯1条を巡らす。器面の荒れが著しいが、外面はタテ・ナナメハケ後にヨコ・ナナメのヘラナデを施す。また胴部内面には指オサエが残る。胴部最大径部には外方から径8mm程度の二次穿孔が残る。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径11.6cm・胴部最大径22.2cm・底部径7.2cm・器高26.1～27cmを測る。00010は丹塗り袋状口縁壺破片である。1/3残存。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径9.4cmを測る。00011は胴部が緩く膨らむ丹塗り甕形上器である。口頸部及び底部を失う。丹塗りは外面のみか。頸部付け根には低い「コ」字状突帯1条を巡らし、壺形より甕形に移行する部分にも「コ」字形突帯1条を巡らす。またこの下部にも低い小型の「M」字形突帯1条を巡らす。また壺形部分には「ノ」字形をした半月状の貼付け浮文が見られる。浮文は長さ3.5cm・幅までの幅0.8cm・中高で高さが0.5cmを測る。器色は内面上部で黒～淡黒色、下面暗褐色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。胴部最大径12.4cm・頸部突帯径12.4cmを測る。00012は甕形土器か。壺形から甕形への移行部分に垂れ気味の三角突帯1条を巡らす。調整は突帯上下がヨコナデで、胴部下半にはタテハケ目を施す。丹の塗布は見られない。胎土は粗で、焼成は堅緻である。突帯部径26.8cmを測る。

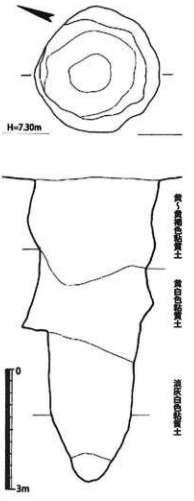


Fig. 4　SE001 井戸出土状況実測図（1：30）

次に下層上器について記す。00013は小型の袋状口縁壺である。口縁は打ち欠きによって殆んど失われている。口縁下には低い三角突帯1条を巡らす。胴部はやや球状をなし、底部端は丸みをもっ

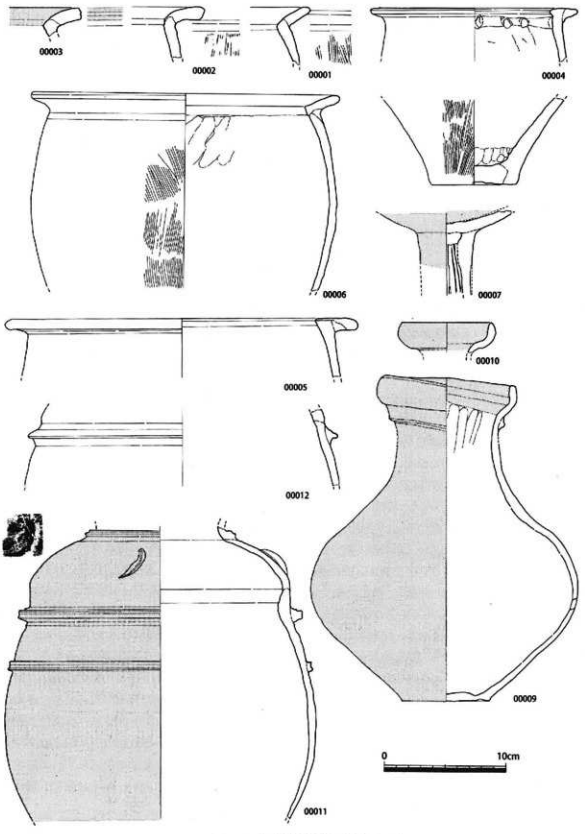


Fig. 5　出土遺物実測図（1）（1：4）

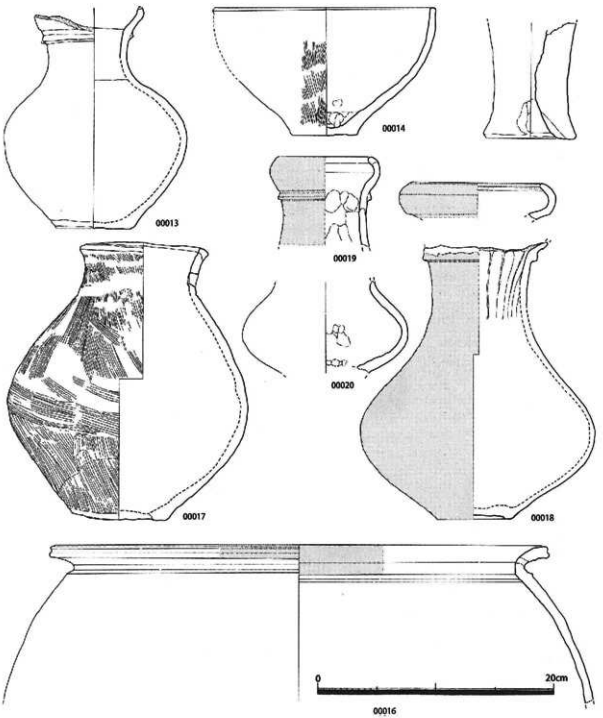


Fig. 6　出土遺物実測図（2）（1：4）

ておさまる。器面の荒れが著しい。器色は胴部外面が赤褐色、底部淡褐色で内面下半が黒色を呈する。また外面下半には大黒斑が見られる。胎土はやや粗で、焼成は軟質である。胴部最大径 15.6cm・底部径 6.25cm・残存器高 18.6cm を測る。00014 は口縁が内弯気味に立ちあがる鉢である。器面の荒れが著しいが、調整は外面にタテハケ目を残す。内面は上半部がヨコナデで、下半部には指オサエの痕跡が点々と残る。器色は外面暗褐～黒褐色で、内面は灰黒～暗灰褐色を呈する。胎土は粗で、石英・

長石の混入多し。焼成はやや軟質である。口径 19cm・底部径 5.5cm・器高 10.6cm を測る。00015 は小型器台である。器壁が厚く、僅かに中空となる。脚部はやや開き気味に踏ん張る。器色は外面が淡褐～淡赤褐色で、内面淡灰色を呈する。また器壁は 2.2 ～ 2.8cm を測り、白～灰白色を呈する。胎土に石英砂の混入多く、焼成は軟質である。脚端径 7.8cm を測る。

Fig. 7　出土遺物実測図（1/40）

次に最下層で出土した土器について記す。00016 は短い「く」字形口縁をもつ中型甕である。口唇部中央は凹線状に窪む。全体に器面の荒れが著しいが、口縁内面の一部と口唇部に丹塗りが残る。また胴部下半には黒色顔料の痕跡が見られる。調整は外面は不明で、内面口縁がヨコハケ後にヨコナデ・胴部はヘラナデ・ナデが残る。器色は淡褐色を呈する。胎土は密で、石英砂を多く含む。焼成堅緻。口径 40.4cm を測る。00017 は頸部附近に一対の焼成前穿孔をもつ壺形土器である。緩く外反する短い口縁と最大径部の低い胴部が特徴で、底部は不安定な平底となる。孔の内面・外底部はやや磨滅しており、釣瓶として使った際の使用痕と考えられる。調整は外面口縁がナナメハケ目後にヨコナデ、胴部上半はタテハケ目で、最大径部附近がヨコハケ目、これ以下はタテハケ目となる。また内面はナ

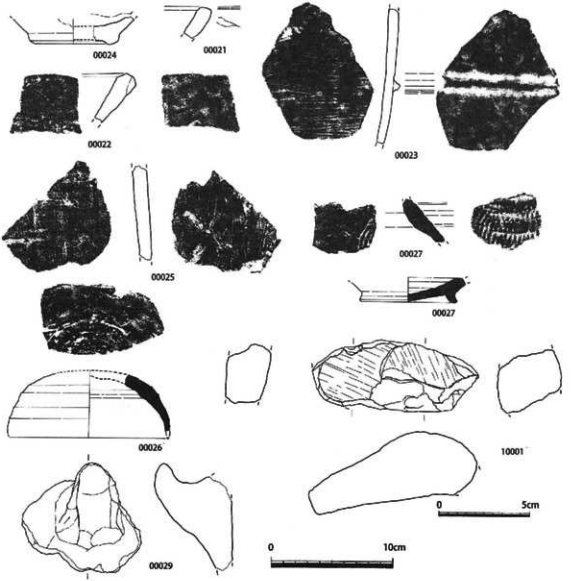


Fig. 8　出土遺物実測図（3）（1：4）

デを施す。ハケ目工具の幅は 1.4cm 程度のものである。器色は外面が淡褐色～黄褐色で、内面口縁付近は橙色を帯びた褐色・これ以下では茶褐色（鉄分付着）、内底部は黒色となる。胴部下端附近に黒斑が見られる。胎土は密で、焼成はやや軟質である。口径 10.9cm・胴部最大径 20.5cm・底部径 8cm・器高 23.55cm を測る。00018 は丹塗り袋状口縁壺である。口縁を打ち欠いている。図示した口縁部は接合しないが、同一個体と考えられる。口縁下には低い段状の三角突帯 1 条を巡らす。半球状の胴部は優美な膨らみをなし上げ底の底部へと繋がる。調整は頸部に連続する指ナデが残る。胎土は密で、焼成も堅緻である。底部径 6.2cm・残存高 23.5cm を測る。00019 も外面が丹塗りの袋状口縁壺破片である。口縁下に低い三角突帯 1 条を巡らす。調整は外面口縁にヨコハケ目がのこり、頸部以下にヨコナデが見られる。また内面には指オサエが全面に残る。器色は内面が淡赤褐色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径 8cm を測る。00020 も外面丹塗りの袋状口縁壺である。00019 と同一個体の可能性もある。調整は胴部上半にヨコヘラナデ、下半にヨコナデが残る。また内面には指オサエが点々と見られる。器色は内面が淡褐色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。胴部最大径 14cm 程度を測る。

SD001 溝出土遺物 (Fig.8)　00021 は瓦質土器鉢破片である。口縁端は平坦である。調整は内外面ともにヨコナデか。一部にヘラ状工具でナデの痕跡がある。また器色は内外面ともに黒灰色を呈し、器壁は淡灰～淡灰褐色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。00022 も瓦質土器鉢である。口縁端部が肥厚し、多面状をなす。調整は外面ヨコナデで、口縁上端部及び内面は荒いヨコハケ目を施す。器色は淡黄白色を呈し、器壁も同色である。胎土に石英砂を若干混入し、焼成は軟質である。00023 は瓦質土器火舎破片である。胴部に三角突帯を巡らす。調整は外面が煤の為不明で、内面は荒いヨコハケ目を施す。器色は外面黒色で、器壁は淡灰色を呈する。胎土には石英細砂を混じ、焼成は堅緻である。00024 は白磁碗破片である。調整は胴部～外底部まで回転ヘラケズリを施す。内底及び外面の一部には淡黄白色釉を薄く懸ける。器壁はやや濁った白色生地である。李朝期製品か。00025 は須恵器平瓦破片である。調整は外面に一方向のヘラケズリを施す。内面は 1 平方センチメートルに 9 × 9 本の経綿をもつ布圧痕が残る。模骨幅は 3 ～ 2.5cm 程度か。器色は外面淡灰色で、内面淡灰褐色を呈する。胎土に石英砂多く、焼成は堅緻である。00026 は須恵器坏蓋である。天井部にヘラケズリを施す。ロクロ回転は時計回りである。口縁部及び内面にはヨコナデを施す。器色は淡灰色を呈する。胎土は粗で、焼成は堅緻である。復元口径 11.2cm を測る。00027 は須恵器高台坏破片である。やや外側に踏ん張る高台を有する。調整は内外面ともにヨコナデ及びナデを施す。器色は暗灰色を呈する。器壁は淡赤褐色である。胎土に石英砂を多く混じ、焼成は堅緻である。高台径 8cm を測る。00028 は須恵器甕破片である。外面に荒い平行タタキ、内面は荒い青海波文にヨコナデを施す。器色は外面青灰色、内面淡青灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。00029 は土師器把手破片である。基部にヘラナデ・指オサエが残る。内面は荒いヘラケズリを施す。器色は淡黄褐色である。胎土に砂粒多く、焼成は軟質である。10001 は安山岩質の石材を使用した砥石である。両面に砥面が残る。長さ 9.1cm・厚さ 4 ～ 2.1cm を測る。

4．まとめ

本地点の調査は、既述の様に開発が先行したために殆んどの遺構は失われたと考えられる。また、周辺 8 次・69 次調査などでの成果から本地点が弥生中期後半期の集落、戦国期の土豪居館と関連する範囲にあることは確かめられた。

9217　那珂遺跡群第 36 次調査 (NAK-36)

所 在 地　福岡市博多区東光寺 1 丁目 332
調査原因　事務所建設
調査期間　1992.6.08~6.10
調査面積　154 ㎡
担 当 者　荒牧宏行・横山邦継
処　　置　記録保存

1．位置・環境　(Fig.1・3)

本調査地点は、福岡平野中央部に南北に延びる那珂丘陵の北東部にあたり、標高は 7.5m 前後をはかる。周辺調査では北東側の 18 次地点、南東側の 36 次地点

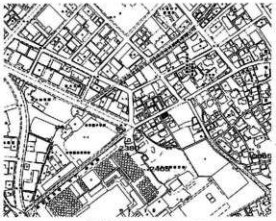


Fig. 1　調査地点の位置 (1：8000)

等の調査成果がある。第 18 次では古墳前期～中期竪穴住居跡 8 軒、古墳後期掘立柱建物 6 棟 (1×2・2×2・3×4 間規模)、弥生後期中葉～後葉の断面が Y 字形をなす溝 1 条、柱穴群などが知られる。また 36 次では弥生中期甕棺墓 2 基、古墳前期溝 4 条、東光寺剣塚古墳 (6 世紀中頃造営、総長 126m で墳長 75m・墳高 7m) の三重周溝の一部、弥生～古墳時代掘立柱建物 1 棟、古代溝・土坑各 1 基、中世溝 3 条・土坑 1 基などが見つかっており、弥生中期後半～中世期までの生活遺構・墓地が密度濃く分布していることが知られた。

・『那珂　6 ―第 18・28・30・31 次調査報告―』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第 292 集」 1992
・『那珂　41 ―那珂遺跡群第 99 次調査報告―』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第 887 集」 2006

2．検出遺構　(Fig.2・4～6)

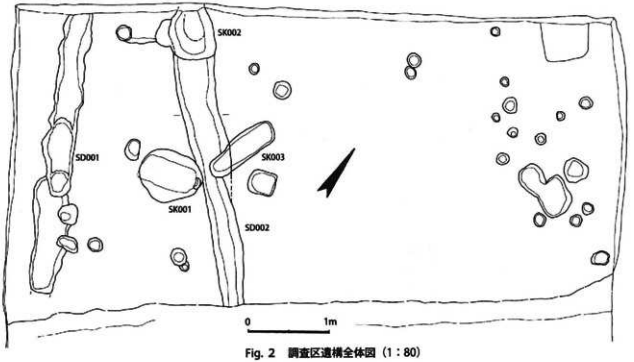


Fig. 2　調査区遺構全体図 (1：80)

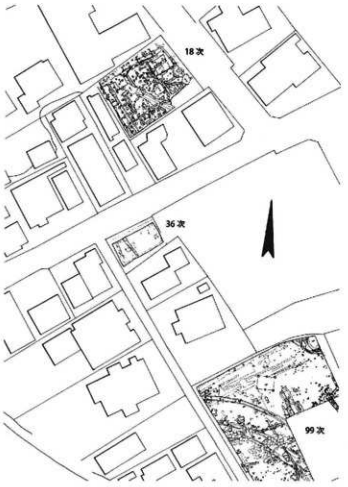


Fig. 3　調査区周辺図（1：1000）

本調査は、工事着工直前に原因者と協議を行い、短期間ではあるが発掘調査を実施したものである。発掘調査では対象区のほぼ南半分が既設建物の基礎工事や過去の開発による削平のために失われていたことから北半部を中心に調査を行った。

遺構は、表土層及び薄い包含層を含む厚さ 40 ～ 60cm の堆積土を除去した面（鳥栖ローム層）上で検出した。

検出した遺構は、土坑 3 基、溝状遺構 2 条、柱穴 25 個以上である。

① 土坑　(Fig.4)

SK001 は、調査区中央で検出した長軸をほぼ東西にとる隅丸長方形土坑である。東壁の一部が剥落しているが、壁面はほぼ垂直に立つ。長辺長 1.38m・短辺長 0.96m ～ 1.06m・深さ 0.8m をはかる。底面はほぼ平坦である。また埋土は黒褐色粘質土で、埋土中より須恵器小破片が出土した。

SK002 は、調査区北端部に位置し、南北溝 SD002 上で検出した不整円形土坑である。北辺側は未調査であるが、長辺長 1.05m・短辺長 0.9 ～ 0.96m・残存する深さ 0.38m をはかる。底面は緩く立ちあがる。遺物は出土しなかった。

SK003 は、調査区中央で検出した長方形土坑である。南北溝 SD002 の切られる。長辺長 1.68m・短辺長 0.5m 前後・深さ 0.1 ～ 0.2m をはかる。なお底面は南側より北側へ緩く傾斜する。埋土は黒味の強い黒色土で、中に焼土や木炭片を多く含む。遺物は出土しなかった。

② 溝状遺構　(Fig.2・5・6)

SD001 は、調査区西側で検出した南北溝である。延長 4.6 m以上・幅 0.4 ～ 0.5 m・深さ 0.25 ～ 0.58 mをはかる。方位は N － 25° － W を示す。底面は北側から南側へ緩く傾斜するが、溝中央部はやや窪み、土坑状となる。埋土は固くしまった黒褐色土である。底面中央の土坑状の部分から弥生後期土器甕の小破片が比較的まとまって出土した。

SD002 は、調査区中央で検出した南北溝である。延長 7.07 m・幅 0.57 ～ 0.84 m・深さ 0.08 ～ 0.1 mをはかる。方位は N － 30° －W を示す。南側に従って幅員が小さくなるが、削平の程度による差であろうか。埋土は明褐色砂質粘土で、埋土中から瓦質土器破片が少量出土した。戦国期の所産と考えられよう。

③ 柱穴　(Fig.2)

調査区東辺を中心に径 0.2 ～ 0.3 m・深さ 0.2 ～ 0.3 mをはかる円形ピット群 (25 個以上) を検出

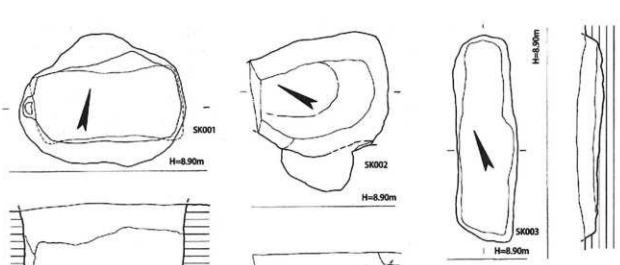


Fig. 4　土坑出土状況実測図（1：30）

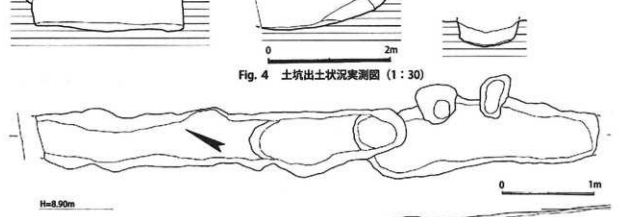


Fig. 5　溝出土状況実測図（1：40）

Fig. 6　SD001 溝断面実測図（1：30）

したが、建物としてはまとまらなかった。埋土は浅い褐色を呈するものが多く、戦国期を主体とする比較的新しい時期のものかと考えられる。

3．出土遺物

以上の遺構に伴う遺物は、SK001 土坑・SD001・002 溝等からのもので、弥生中期・後期甕、古墳後期甕、瓦質土器鉢などコンテナ 2 箱程度出土したが、何れも小破片であり図化に耐えなかった。

4．まとめ

既述の様に本調査では希薄な分布ではあるが、弥生時代後期、古墳時代後期、戦国期の遺構が知られた。これらは周辺 18 次および 36 次調査の成果に見られる様に弥生～中世期にかかる各時期の遺構群と一体の広がりをもつと考えられ、今後の解明が期待される。

報　告

9848堅粕遺跡第10次調査(KKS－10)

所 在 地　福岡市博多区吉塚１丁目９−７　　調査面積　１００㎡
調査原因　店舗付共同住宅建設　　担 当 者　小林義彦
調査期間　1998.12.7～12.11　　処　　置　記録保存

１．立地と歴史的環境　(Fig. 1・2)

堅粕遺跡第 10 次調査区は、博多湾に沿って博多区吉塚１丁目にあり、博多湾によって形成された砂州状の古砂丘上に立地している。堅粕遺跡は、石堂川の川口右岸に拡がる古砂丘上に立地し、石堂川を挟んだ砂丘上には古代から中世の貿易都市として栄えた博多遺跡群や箱崎遺跡が連綿と繋がっている。堅粕遺跡は、東西長が 400m、南北長が 300m ほどの遺跡で、これまでの調査からその初現は弥生時代後期に始まり、古墳時代前期には方形周溝墓や土壙墓群などの墳墓域と井戸や土壙からなる集落域が検出されている。また古代から中世には博多や箱崎に挟まれて立地する所以か越州窯系青磁や緑釉陶磁器などの輸入陶磁器を伴う集落域が拡がっている。第

Fig. 1　調査地点位置図(035 吉塚 0122 1/8,000)

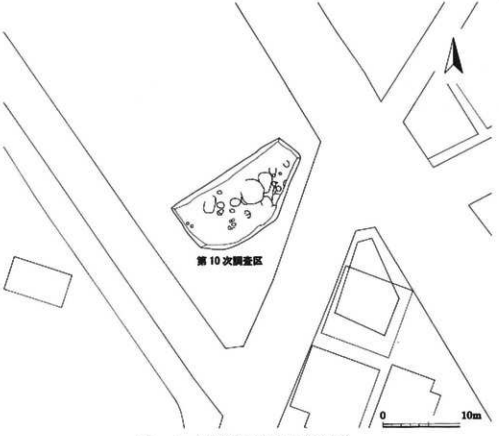


Fig. 2　調査区周辺現況図 (1/400)

10 次調査区は、この堅和遺跡の北東域のあり、南に隣接する第 9 次調査区では、弥生時代後期の土壙や奈良時代～平安時代初めの土壙や井戸などが検出されている。

第 10 次調査は、小規模事業に伴う緊急発掘調査で、補助事業として実施した。

2．調査の記録　(Fig. 3　ph. 1)

第 10 次調査区の基本的層序は、客土層が 30～45cm の厚さで堆積し、その直下は古砂丘面の黄白色砂層になる。この古砂丘上に淡茶褐色～暗茶褐色砂を覆土とする土壙とピットが検出された。

検出した遺構は、3 基の土壙とピットであるが、削平を受けて全容の明確でない小土壙的な遺構もある。プラン的には円～長方形で、その機能は明らかではない。出土する遺物も少なく開削期も明確にはし難い。

1 号土壙　SK－01　(Fig. 4　ph. 2)

1 号土壙は、調査区の中央部に位置する大型の土壙で、東壁は 3 号土壙の西南壁を切っている。平面形は、西壁が攪乱を受けて消失しているが、短辺が 260cm、長辺が 280cm ほどの円形プランを呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は 92cm。溝底は緩やかな凹レンズ状をなしている。遺物は土師質の甕片と陶磁器片がわずかに出土した。

2 号土壙　SK－02　(Fig. 4)

2 号土壙は、調査区の西隅に位置し、3m 東には 1 号土壙がある。北西隅壁は攪乱を受けて消失しているが、平面形は、短辺が 120cm、長辺が 185～200cm の隅丸長方形プランをなし、主軸方位は N－21° 28′ －E。壁面は、緩やかに立ち上がり、壁高は 28cm を測る。壙底は、ほぼ平坦で断面形は緩やかな逆台形をなしている。覆土は暗茶褐色土の単一層で、遺物は、土師器と須恵器の小片が出土した。

3 号土壙　SK－03　(Fig. 4)

3 号土壙は、調査区の北東寄りに位置し、南西壁側は 1 号土壙に切られている。平面形は、長辺が 230cm、短辺が 155cm の南小口壁が若干短いやや尖った長方形プランをなし、N－14° 58′ －E に主軸方位をとる。深さが 30cm の壁面は緩やかに立ち上がり、壙底は、浅い凹レンズ状をなしている。遺物は、土師器小片がわずかに出土した。

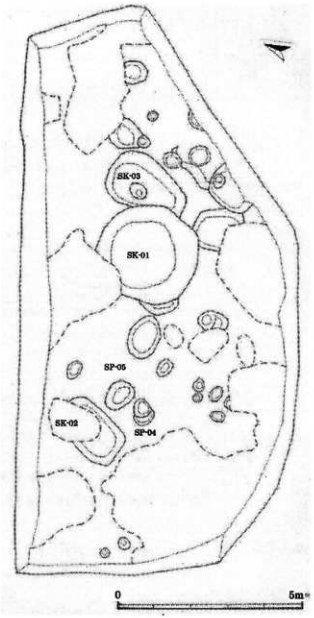


Fig. 3　遺構配置図（1／100）

3．おわりに

第 10 次調査では、古墳時代～古代の土壙 3 基とピットを検出した。しかし、調査範囲が狭小な上に攪乱が著しいくその全容は明確ではないが、第 9 次調査区の外縁を構成する古代の集落域の一部と考えられる。更に、その周縁域には同期の遺構群が拡がっていることが想起され、周縁域の遺構の検出によって遺跡の詳細な性格や時期等が明らかにされよう。

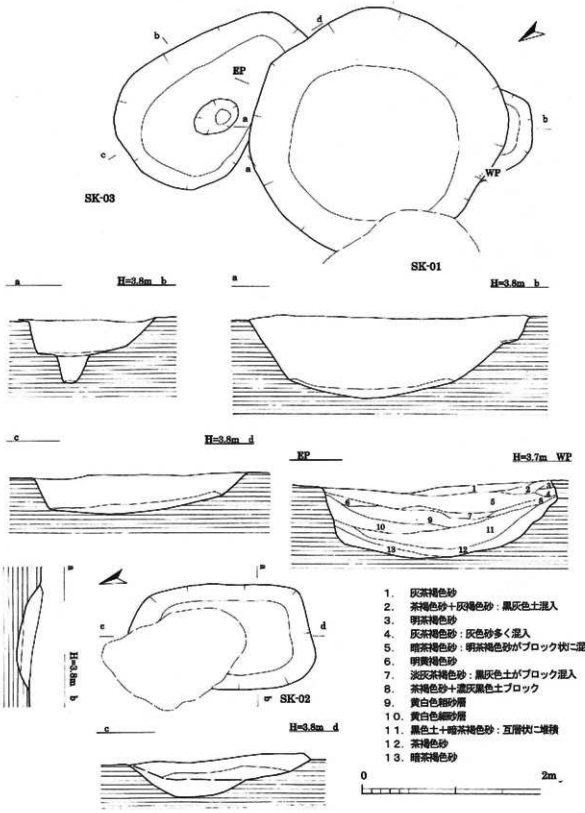
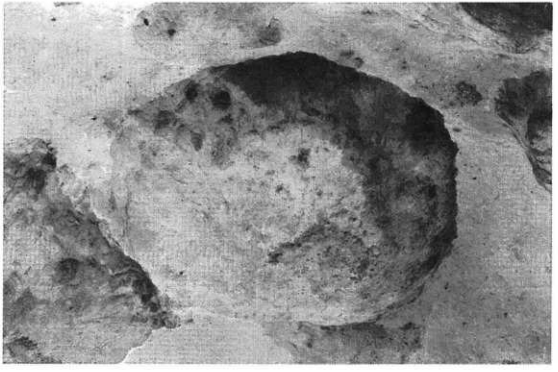


Fig. 4　1～3号土壙実測図（1／40）

Ph. 1　調査区全景（西から）



Ph. 2　1号土壙（西から）

付　資料紹介　　上臼井遺跡（かみうすい）

所在地　福岡市博多区大字下臼井４３－１所在地
調査日　2012年９月６日試掘（事前審査番号24-2-467）
調査者　米倉秀紀　森本幹彦

１．はじめに

老松神社境内の拝殿・絵馬殿の増築工事に伴う試掘調査で、中世墓の発見があった。これまでほとんど実態が分からなかった上臼井遺跡内であり、この場を借りて、資料紹介を行いたい。

遺跡は福岡平野東部の月隈丘陵に分布する遺跡の一つで、その中央に老松神社があり、調査地点はその境内に位置する。現況は西に平野を臨む丘陵斜面を平坦に造成した土地で、標高１０m前後を測る。神社は寛政年間からで、遺跡は弥生時代の甕棺遺跡として登録されているが、これまでほとんど調査例がない。

２．試掘調査でみつかった遺構と遺物

試掘箇所は境内北部の空き地（絵馬殿建設予定地）で、トレンチは幅0.7 m、長さ６mの東西方向である。バラス等の現代盛土層より25 ｃm下で暗赤褐色土盛土、40 ｃm下で花崗岩風化土二次堆積土（中世以降の整地層か）となり、遺構面となっている。地山はＧＬ－70 ｃmの赤色花崗岩風化土である。トレンチ西部では遺構面直上に薄い旧表土層がある。トレンチ東部で中世墓、中央から西部で柱穴や土坑を検出したが、後者は灰色土主体の覆土などから近世以降のもので、神社に関連する遺構である可能性が高い。試掘調査の結果を受けて、基礎の設計変更がなされたため、発掘調査に至っていない。

Fig. 1　遺跡と調査位置（1:10000）

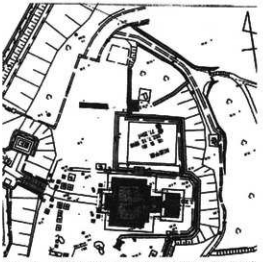


Fig. 2　老松神社境内とトレンチ位置（1:1000）

Fig. 3　試掘トレンチ実測図（1:100・1:80）

トレンチ東部の遺構は幅 140 ｃｍ、深さ 40 ｃｍ前後で、その下層より略完形の陶磁器などが出土した。試掘トレンチを東から掘削したために、土層の認識が不十分なまま、整地層と考えて掘り下げてしまったが、遺物の出土位置周辺を精査して中世墓と判明したものである。遺構埋土は墓壙掘削土を埋め戻したものとみられるが、その土層断面から、幅 50 ｃｍほどの木棺墓と考えられる。出土遺物は中世前期の青磁碗、白磁碗、鉄鎌で、トレンチ北壁周辺の棺床土上からまとまって出土している。遺構の主軸方向は南北方向に近く、遺物（副葬品）の集中箇所付近が頭位と考えられる。

出土遺物（図４）は中世墓の副葬品である青磁碗（３）、白磁碗（２）、鉄鎌（１）である。１は試掘の掘削により破損し、一部が遺存するのみである。幅３～3.2cm、厚み 0.3cm、長さ 6.2cm 以上で、内湾する鎌の刃部とみられる。一部に木質の付着があるが、木目が刃に平行方向であるので、把の痕跡ではなく、木棺材の痕跡であろう。２は器高 7.3cm、口径 16.6 ｃｍ、高台径 5.3cm で、見込みに目跡の付着痕跡がある。釉は青みがかった厚ぼったいもので、胎土はやや須恵質である。３は器高 7.8cm、口径 16.2cm、高台径 6.4cm、高台は削り出しである。内面に草花文が施されるが、線刻がシャープでなく、釉薬も不透明であるため、文様は不鮮明である。釉は白みがかった淡緑青色で、胎土は白色精良である。底外面が赤変している。これらの陶磁器はやや粗製の類で中国南方産、時期は 12 世紀後半から 13 世紀前半と考えられる。

Ph. 1　調査地点（北から）

Ph. 2　試掘トレンチ東部（南から）

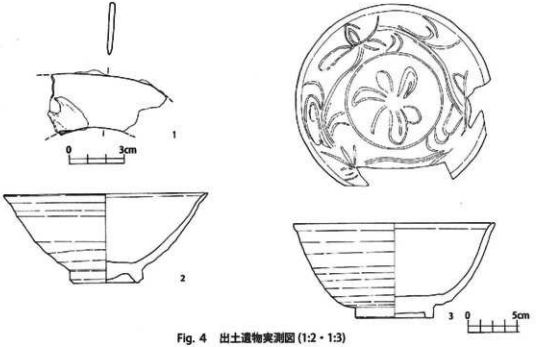


Fig. 4　出土遺物実測図 (1:2・1:3)

X　平成24年度福岡市新指定および新登録文化財

福岡市では平成24年4月に福岡市文化財保護条例を改正し、文化財保護条例で規定されるすべての類型を対象とした登録文化財の制度を新たに設けた。登録文化財は従来の指定制度に比べ、現状変更を届出制にするなど規制を緩やかにして、使いながら文化財を守るという、国の制度に準じた内容となっているが、補助や税制上の優遇措置は設けられていない。

平成24年度は、制度創設後、初となる4件の登録文化財を含め6件の文化財について、平成25年2月15日の文化財保護審議会において答申を得、平成25年3月18日の福岡市公報において告示された。

1　指定文化財の概要

区　分	種別	指定名称	員数	所在地	所有者・保持団体
有形文化財	歴史資料	宗勝寺資料	13点	福岡市東区 下原5丁目	宗教法人　宗勝寺
民俗文化財	無形民俗	今宿上町天満宮 鬼すべ行事		福岡市西区 今宿3丁目	今宿上町天満宮 鬼すべ行事保存会

（1）宗勝寺資料　13点　（有形文化財／歴史資料）

宗勝寺資料は福岡市東区下原に所在する曹洞宗寺院、昌光山宗勝寺に伝来する歴史資料である。その総数は豊臣期から近世にかけての古文書11点、高札1点、宗勝寺の開基である戦国時代末から織豊時代にかけて活躍した武将乃美宗勝を描いた絵画1幅の都合13点を数える。

昌光山宗勝寺は戦国時代後期から織豊時代にかけて活躍した武将乃美宗勝（1527～92）を開基とする寺院である。乃美宗勝は中世備後（現在の広島県東部）の有力領主小早川氏の一族乃美氏の出身で、安芸国忠海（現広島県竹原市）を本拠とした。安芸毛利氏から養子に入った主君小早川隆景に従い、第一線の軍事指揮官として、特に水軍の統率者として数々の戦功を立て、16世紀後期の西日本における毛利氏の勢力拡大に大きく寄与した。天正15年(1587)の豊臣政権による九州国分けで、筑前一国と筑後肥後の一部が小早川隆景に与えられると筑前へ移り、名島築城の後は立花山城代を勤めたという。天正20（文禄元・1592）年の文禄の役開始後、一旦は朝鮮半島へ従軍するが病を得て帰国、同年9月23日に立花山城下秋山の屋敷で没した。近世の地誌や寺伝によれば、乃美宗勝は永禄12年(1569)に没した母、新福院殿月窓性光大姉の菩提所として、秋山に真福寺（新福寺）を開いたという。宗勝没後、その遺骸を当寺境内に埋葬し、宗勝の法名「宗勝寺殿天輿勝運」に従って寺号を改めたのが宗勝寺の草創である。

（文禄4年・1595）11月25日　小早川隆景書状
（29.6cm×43.8cm）

慶長5年(1600)の関ヶ原合戦後、筑前国の領主は小早川氏から黒田氏に交替し、備前国（現在の岡山県）に移る小早川氏に従って乃美氏も筑前国から離れた。慶長7年に小早川氏が改易となった後、宗勝の息景継は毛利氏に仕え、周防国（現在の山口

県東部）の内に領地を給付された。景継の子元種の代に家名を乃美から浦に改め、子孫は萩藩の上級藩士として継続した。一方で宗勝寺は前代以来の由緒から福岡藩政下においても継続的に保護され、寺領を与えられた。慶長 8 年には黒田長政から宗勝寺に対して下原村内で 20 石の寺領が寄進され、寛永 18 年(1641)には黒田忠之からこれが安堵されている。

古文書は小早川氏、黒田長政、黒田忠之による寺領寄進に係るものの他、歴代住持の代々記等が存在する。絹本著色乃美宗勝像は、侍烏帽子を頂き、左三つ巴紋の入った素襖、内衣に小袖を身につけ、白小紋縁の青畳に着座した老年の宗勝の姿を描く。賛文は明和 5 年(1768)の年記を持ち、宗勝寺十世住持の見宗玄桃和尚によって記されたものである。この画像は以前より伝えられていた肖像が朽損したのに替えて、萩の浦家より新調寄進された。宗勝の肖像は乃美氏の故郷忠海勝運寺（広島県竹原市）が所蔵する甲冑着用像・素襖着用像、山口県柳井市立図書館所蔵の甲冑着用像が知られるが、現在のところ素襖着用像の中では宗勝寺像が最も古く、比較検討の素材としても重要である。

絹本著色乃美宗勝像・明和 5 年（1768）着賛
（96.1 cm × 49.0 cm）

宗勝寺資料は市内曹洞宗寺院に伝来する古文書・歴史資料の中でも、近世以前に遡る特に古い時期の資料を含む点で希少である。絵画は本寺の開基である乃美宗勝の風貌を偲ばせる数少ない資料として、また近世における宗勝寺と宗勝子孫浦家の関係を示す点で重要である。中近世移行期の小早川氏による筑前国支配に関連する資料としても市域の通史を理解する上で欠かせない重要な位置を占めるものであり、本市の文化財に指定してその保護を図る必要がある。

（2）今宿上町天満宮鬼すべ行事　（民俗文化財／無形民俗）

今宿上町天満宮鬼すべ行事は、毎年 1 月 7 日に福岡市西区今宿の上町天満宮境内を中心に上町の町内で催される祭である。祭りは上町天満宮の氏子を中心とする上町町内会が主体となって運営されてきた。

『筑前国続風土記』以下の近世の地誌によれば、今宿町は 16 世紀後半の永禄年間(1558～70)に領主原田氏の手により初めて町立てが為されたという。今宿町は上町・横町と寛文 2 年(1662)に新たに住民が移住した松原の三ヶ町から成る。町場として、また唐津街道の宿駅として、横町には公的運送を担う人馬継所が、また志摩郡の地方行政を担う福岡藩の郡屋等が設置され繁栄した。

今宿上町天満宮鬼すべ行事は、悪鬼を払い疫癘を除いて一年の息災を願う追儺祭の一類型としてみることができる。古代には追儺は宮中の年中行事として歳末に行われたが、時代が下ると寺院の修正会や民間の節分行事と融合し年頭に行われる事が多くなった。今宿上町において鬼すべ行事が始められた時期は明確でないが、地元にはいつの頃か大宰府より天満宮を勧請し、その際に大宰府の鬼すべを模倣して開始したという言い伝えが残る。行事で使用する道具類の

多くに、昭和９年(1934)３月の「百年祭」に際して新調した旨の墨書があり、ここから天満宮の勧請、または行事の開始が天保６年(1835)頃のことである可能性が推測される。

現状では１月７日に祭が行われる。行事の運営は町内会の役員の他、年ごとに町内の各隣組住民が交代で担っている。１月７日の午後7時頃、祭りに参加する人々が天満宮境内に行列を組む。行列は高張り提灯、鬼面(２面)、御幣、鬼(赤の柔道着、頭と背中に藁角・藁褌(藁で作製した角状の飾り)を付ける)、「お守り」(長持)、太鼓、鐘、鈴、オシオイ桶の順で、その後ろに子供達が並んで随う。道具は全て白丁姿の児童が持つ。かつては男の子のみが参加する行事であったが、近年になって女の子も加わるようになった。

一行は鐘と太鼓を鳴らして海岸へ下り、浜でオシオイ取りを行う。オシオイ取りの後、再び行列を組んで上町へ戻り、町内の隣組毎に定められた接待所(平成 25 年１月現在は７ヶ所)へ立ち寄る。接待所に近づくと鬼を中心に男性が 4，5 名密集し、「鬼じゃ鬼じゃ」と声をあげて互いに押し合う(「鬼押し」)。「鬼押し」の後に接待所へ入って新年の挨拶をし、酒食の饗応を受ける。続いて子供たちも接待所に入る。御幣を持つ子供はお祓いを行う。オシオイ桶を持つ子供は接待所にオシオイを撒き、希望者にはオシオイを配布する。長持ちを持つ子供は接待所に入り、「お守り」と声をかけるが、これはかつて行われていた配札の名残りと考えられる。それぞれの役目を務めた後に、子どもたちにも料理やお菓子、飲み物が振る舞われる。

一行は各当番所を廻った後、８時 30 分頃に天満宮境内へ戻る。天満宮の境内には松の枝や注連飾りなどで火が焚かれている。境内で再び「鬼押し」が行われた後、集団は境内に作られた「鬼くら」に入り、最後に「祝いめでた」が歌われて９時頃行事は終了する。最後の「祝いめでた」の唱和は近年に始められた新しい慣行である。参拝者の中には焚き火から燻る松の枝を曳き出し、火災除けのお守りとして自宅に持ち帰る者もある。

行事の最後に天満宮境内で行われる「鬼押し」の際、途中から「かえましょう、かえましょう」の声がかかるのは、太宰府で行われる「鷽替え」行事の影響であると考えられる。この日は天満宮拝殿に沢山の木鷽が用意され、訪れた参拝者にそれぞれ世話人から手渡される。木鷽の製作は１月７日以前に、町内会の役員と当番の隣組住民が集まって行っている。今宿上町では木鷽の材料として、近隣の山から伐りだしたハゼの木を用いている。

今宿上町天満宮鬼すべ行事は、年頭に招福攘災を願う追儺の行事が市域において地域的な展開を遂げた一典型として捉えることができる。行事の冒頭に行われるオシオイ取りや、町内の各所で行われる酒肴の接待は、博多松ばやしや今津の十一日まつり、唐泊のどんたくといった周辺地域の他の行事とも共通する特

色であり、祭の基盤にはかつて地域で広く行われていた祝祭の慣行が存在するものと考えられる。今宿上町天満宮鬼すべ行事は江戸時代末期の今宿上町の繁栄と、当時この町に住んでいた人々の信仰のあり方を現代にまで伝える貴重な民俗行事であり、本市の文化財に指定することにより地域住民の手で長く継承保存されることが望まれる。

2 登録文化財の概要

登録区分	種別	指定名称	員数	所在地	所有者・保持団体
有形文化財	建造物	旧福岡市動植物園正門	1棟	福岡市東区馬出一丁目66	福岡市立馬出小学校 校長　太田恵介
有形文化財	建造物	福岡県立修猷館高等学校旧正門	1棟	福岡市早良区西新六丁目661-1	福岡県立修猷館高等学校 館長　奥山訓近
有形文化財	建造物	石橋長次郎家住宅	1棟	福岡市西区姪の浜三丁目3378-1	個人
有形文化財	建造物	石橋磨延家住宅	1棟	福岡市西区姪の浜三丁目3380-1	個人

（1）旧福岡市動植物園正門　1棟　（有形文化財／建造物）

旧福岡市動植物園は、昭和天皇即位記念行事として昭和3(1928)年に計画され、5年後の昭和8(1933)年8月に「御大典記念福岡市動植物園」として当時の東公園内、馬出の地に開園した。6,000 坪の敷地にはゾウ、ヒョウ、ライオン、白クマ、トラ、ニシキヘビ、ワニ等々の多くの動物が飼育されていた。当時の新聞には、東京、大阪、京都、名古屋、熊本にあった五大動物園にも遜色ないと紹介され、子どもたちの人気を博していた。開園当初の入場料は大人 15 銭、子供8銭であった。その後、太平洋戦争末期の昭和 19(1944)年、戦時下の厳しい状況から各地の動物園は閉園に追い込まれ、当動植物園でも猛獣は殺処分、小動物は剥製にされて閉園した。開園から 11 年後の出来事であった。

新たな動物園は昭和 28(1953)年には中央区南公園に設けられ、旧動植物園の地には昭和 24(1949)年に福岡中学校が開校し、旧動植物園の門は学校の正門として利用された。その後、昭和 59(1984)年には馬出小学校が当該地に移転し、現在に至っている。旧動植物園の門がある場所は馬出小学校敷地の西角部分にあたり、南西向きに開口する。

構造は鉄筋コンクリート造。左右対称、同形の門柱2基が向かい合って設置されている。柱部分には幾何学模様を基調

とする装飾が、また上部にゾウの頭のオブジェが向かい合って取り付けられており、門の大きな特徴となっている。規模は柱1基の大きさが、高さ406㎝、幅は基底部で245cm×95cm、柱間が基底部で338cmを計る。現況では基底部が人造砕石洗出し、その他の部分はアクリル多彩リシン吹き付け、ゾウのオブジェはFRP製である。古写真を見ると、かつて門扉や袖塀が存在したが、現在は全て失われている。設計者は不明。ゾウの装飾や門柱の形は、ドイツハンブルグ市のハーゲンベック動物園の門を模したとされる。ハーゲンベック動物園は動物商として活躍したカール・ハーゲンベック氏が1907年に開いた動物園で、ハーゲンベック式とも呼ばれる無柵放養式やパノラマ展示といった見せ方により注目を集め、戦前期における日本の動物園にも大きな影響を及ぼしたとされる。

昭和24年の福岡中学校開校以後、旧動植物園正門は学校の校門として使われ、特徴的な姿から多くの生徒の思い出に刻まれたが、昭和59年の馬出小学校移転に伴い正門は現在の北西側道路沿いに移され、「ゾウの門」はその役目を終えた。当時、傷みが著しく、ゾウのオブジェは大半が失われ鉄筋が剥き出しとなり、門本体も部分的に欠損が生じていた。また、この時点まで袖塀の一部は残されたままであった。その後、平成4年に実施された馬出小学校接道緑化工事に伴い、袖塀の撤去、門の修復が行われ、当初はモルタル製であったゾウのオブジェもFRPによって復元されるとともに、門の片側敷地が花壇として整備され、地元の憩いの場として供されている。部分的な復元や修復は行われているものの、色調を含む外観は、古写真等を見る限り当初から大きく変化はしていないものと推測される。

動物園は近代の博覧会に繋がる施設である。子供の情操に深く寄与するもので、近代の成熟した都市を代表する施設ともいえる。しかし一方で、戦争の影響を受けた施設でもあった。福岡市において昭和初期に動物園が設けられ、11年後に閉じざるをえなかった歴史を証言する遺産として重要であり、しかも場所を変えず、動物園から小学校という用途の変更はありながらも子供達に深く関わりながら建ち続けていることは貴重である。文化財として顕彰し、閉じざるを得なかった動物園の歴史を広く知ってもらう意義は大きい。その特徴的な姿形は、歴史とともに市の歴史的景観に寄与するものであり、登録文化財としてふさわしい。

（2）　福岡県立修猷館高等学校旧正門　1棟　（有形文化財／建造物）

福岡県立修猷館高等学校は藩校修猷館に始まる。藩校修猷館が明治4(1871)年に廃止された後、黒田家の援助で明治14(1881)年浜の町に「藤雲館」として開校。その後、明治18(1885)年に「英語専修修猷館」として天神町に設立された。藩校修猷館は、天明4(1784)年福岡藩の東学問所として福岡城上之橋に設立されたものを礎とする。「修猷」とは、『尚書』微子之命の「踐修厥猷」(厥の猷を踐み修む)による。設立当初は黒田家の援助で維持され

長い歴史を持つ修猷館高校であるが、創立記念などを機に校舎の更新が進み、歴史的な

校舎は残されていない。その中で唯一残された建造物が旧正門である。現在、国道 202 号線に南面して位置する正門は、昭和 12～14(1937～1939)年の新校舎建設に伴い新たに設けられたものであり、それまでの正門は敷地の東側に開口し、現在は旧正門としてその姿をとどめている。

構造は自然石(花崗岩)製の柱門で、主柱と副柱各2本と4枚の門扉で構成される。規模は門柱の大きさ幅 39cm、高さ 310cm、柱間は主柱間が 269cm、副柱間は 115cm(いずれも内法)である。右側の主柱に篆書で「修猷館」の文字が陽刻される。建設年代は明確ではないが、明治 33 年の西新町への移転にともなって建てられたと考えられる。門柱の両側には煉瓦塀が繋がるが、明治 33 年移転当時とされる古写真には門両側に板塀が写り、また昭和 12 年以前の敷地を描いた絵には生け垣が描かれていることから、煉瓦塀は後の時代のものと思われる。鉄製の門扉は、昭和 44 年に第 21 回卒業生によって新しく作り直されたものであるが、古写真によれば、門扉のデザインは建設当初のものを踏襲したことが窺える。ただし、敷地に残るレールの跡や柱に残る補修痕などから見ると、左右の脇門は開口方向が現在と逆であったようである。

市内では平成 23 年に、戦前の高等学校(旧制中学)校舎として唯一残る、福岡県立福岡高等学校校舎が県の有形文化財に指定されたが、その他は修猷館高等学校に限らず歴史的な校舎が次々と失われている現状がある。落校を起源とする歴史ある学校の歴史的遺産として、福岡市の歴史を語る上で貴重な文化財であり、通りに面して市域の歴史的景観に寄与する文化財として評価できる。位置や門柱そのものに大きな改変はなく、全体には当初の姿を止めるものとなっており、登録文化財として顕彰し、長く保存されることが望まれる。

(3)　石橋長次郎家住宅　1棟　(有形文化財／建造物)

福岡市西区の姪の浜は、江戸時代、海運、漁業、製塩業で栄えた。門司から唐津に向かう唐津街道が通るとともに、名柄川河口に港を持ち、商船で栄えた商人町、漁師町、宿場町が雑居する様子は「姪浜千軒」と呼ばれた。儒学者亀井南冥生誕の地としても知られる。

旧唐津街道沿いを中心とする旧魚町、旧網屋町周辺(現在の姪の浜三丁目・六丁目)には、平成17年の福岡西方沖地震でかなり減少したとはいえ、往時を偲ばせる町家が残り、住吉神社、浄土宗天然寺、時宗光福寺など多くの寺社などとともに、歴史的風致を形成している。

その中で石橋長次郎家住宅は、宿場の中央付近、旧官前町にある。かつて米を扱う商家であった。建物は主屋が桁行 11.6m、梁間 9.5m(復原)、一部2階、切妻造平入、東西面庇付、桟瓦葺。台所棟が桁行8.5m、梁間 3.6m(復原)、切妻造、桟瓦葺他、主屋に接続。西面する整形四間取に、南に間口 1.5 間の通りニワ、奥に台所をもうけた平面。ニワ沿いに板の間と居間、上手にヘヤと座敷を配し、ニワ境は後部を除いて開放する。座敷は8畳敷で、北側にトコと押入を並べ、東に平書院、西に押入と仏壇を置く。小屋組は和小屋の棟下の地棟と牛梁間を土壁で固め、西半に登梁を架ける。棟位置は妻中心と一致する。通りに面した板の間と通りニワに改変があり、建具の一部新設、浴室の増築が見られ

るが、全体的に改造は少なく旧状をよくとどめている。建築年代は型式から明治前半と推定する。

外観正面は1階の右半部は変更されているものの、出格子と戸袋、ツシ2階の額縁窓をもつ白壁の土蔵造は当初形態を保持している。昭和20年の福岡大空襲では、姪の浜地区も罹災。石橋長次郎家住宅も隣家が火災にあったものの、家人や周辺住人の消火活動により、辛うじて焼失を免れたとのことである。

石橋長次郎家住宅は、姪の浜地域の町家の中でも建築年代が明治前半と古い部類に属し、なおかつ建築当時の状況を止めた、間口の広い数少ない事例といえる。戦火も免れ現在にその姿を伝えており、市域の歴史的景観に寄与する建造物といえる。登録文化財として長く伝えられることが望まれる。

（4）石橋啓延家住宅　1棟　　（有形文化財／建造物）

姪浜地区の歴史的な経緯や景観については前項に譲る。石橋啓延家住宅は、宿場の中央付近、旧街道に面した旧宮前町にある。かつて紙屋、質屋を営む商家であった。

建物は主屋が桁行 7.0m、梁間 10.4m（復原）、切妻造平入、桟瓦葺、南面。南北庇付の主屋の北に庇を欠き取った形で桁行 4.3m、梁間 4.6m切妻造妻入、桟瓦葺の台所が接続する。平面は東に 1.5 間幅の通りニワがあり、ニワに面して南から表の間、中の間と仏間、板の間と連なる。ニワとの境は全面開放する。中の間は4畳半の広さで通りニワ中央部とあわせて吹抜けとし、棹縁天井を高く張り、西指鴨居に神棚を祀る。ニワに続く奥に台所を付設する。ツシ2階は正面に鉄格子、銅板張開戸を付けた窓を2つ設ける。表の間、同じくニワ、仏間・押入の各上部を納戸とし、登梁小屋組を見せる。小屋組は棟下を天秤梁上の地棟に棟束を立て、棟位置は妻中心より半間後寄りである。棟札等は無く詳細な建築年代や大工などは不明であるが、形式などから明治中期頃の建築と考えられる。書や文書などの歴史資料も幾つか伝えられており、その中には嘉永7(1854)年の家相図が保管されているが、現状の平面とは若干異なる。

石橋啓延家住宅は、近隣の石橋長次郎家住宅とともに、この地域の明治以降の姿を伝える貴重な存在である。外観正面の1階部分の建具などが改造されているものの、建築年代も明治中期と考えられ、古い方に属する。家相図といった歴史資料も貴重である。市域の歴史的景観に寄与する建造物であり、登録文化財として長く伝えられることが望まれる。

報告書抄録

ふりがな	ふくおかしまいぞうぶんかざいれんぽう
書名	福岡市埋蔵文化財年報
副書名	平成24(2012)年度版
巻次	27
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	加藤良彦
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	福岡市中央区天神1丁目8-1
発行年月日	平成26年1月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ざっしょのくまいせき 雑餉隈遺跡(第18次)	はかたくしょうなんまち 博多区昭南町2丁目27	40132	54	33-32-21	130-27-49	2012.6.18～ 2012.7.6	105.0	記録保存
すせんじいせき 周船寺遺跡(第21次)	にしくすせんじ 西区周船寺1丁目519-3	40135	689	33-34-23	130-14-33	2012.7.12～ 2012.7.259	139.6	記録保存
なかいせきくん 那珂遺跡群(第141次)	はかたくなか 博多区那珂1丁目324外	40132	85	33-34-17	130-26-16	2012.12.12～ 2012.12.13	11.0	記録保存
いたづけいせき 板付遺跡(第73次)	はかたくいたづけ 博多区板付5丁目4-4外	40132	94	33-33-55	130-27-14	2013.2.13～ 2013.2.22	50.0	記録保存
じょうのはらいせき 城ノ原遺跡(第2次)	にしくかみやまと 西区上山門2丁目1021-1	40135	508	33-34-20	130-18-19	2013.2.18～ 2013.2.28	277.0	記録保存
ひじしょうじ 都地城址(第1次)	にしくとじ 西区都地	40135	431	33-32-6	130-19-7	1975.3.24～ 1975.4.8	200.0	記録保存
ありたいせきぐん 有田遺跡群(第20次)	きわらくありた 早良区有田1丁目14-20	40137	309	33-33-46	130-20-8	1979.7.3	46.0	記録保存
なかいせきぐん 那珂遺跡群(第5次)	はかたくなか 博多区那珂1丁目377-3	40132	85	33-34-22	130-26-18	1983.6.20～ 1983.7.3	100.0	記録保存
なかいせきぐん 那珂遺跡群(第24次)	はかたくなか 博多区那珂1丁目590-2	40132	85	33-34-28	130-26-6	1989.9.18～ 1989.9.20	352.0	記録保存
なかいせきぐん 那珂遺跡群(第36次)	はかたくとうこうじ 博多区東光寺1丁目332	40132	85	33-36-4	130-25-57	1992.6.8～ 1992.6.10	154.0	記録保存
かたかずいせき 堅粕遺跡(第10次)	はかたよしづか 博多区吉塚1丁目9-7	40132	122	33-33-33	130-25-23	1998.12.7～ 1998.12.11	100.0	記録保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
雑餉隈遺跡(第18次)	集落	古墳/中世	竪穴住居+土坑+溝+柱穴	土師器+須恵器+鉄族+石鏃	住居に竈付設
周船寺遺跡(第21次)	集落	弥生	土坑+溝+柱穴	突帯文土器+石鏃	弥生前期初頭期の集落
那珂遺跡群(第141次)	集落	弥生/中世	甕棺+井戸+溝+柱穴	須恵器+土師器+瓦質土器+弥生土器	甕棺墓
板付遺跡(第73次)	集落	弥生	貯蔵穴+柱穴	弥生土器+石包丁	中期初頭貯蔵穴
城ノ原遺跡(第2次)	集落	古墳/古代	土坑+掘立柱建物+柱穴	土師器+須恵器+弥生土器+瓦+石槌	古代瓦の出土
都地城址(第1次)	城館	中世	堀+土塁+柱穴	磁器+陶器+土師器+須恵器+弥生土器+石斧+石包丁	戦国期城館
有田遺跡群(第20次)	集落	弥生/古墳	溝+掘立柱建物	弥生土器	
那珂遺跡群(第5次)	墳墓?	弥生/古墳	溝	弥生土器+土師器	古墳前期の祭祀を伴う周溝
那珂遺跡群(第24次)	集落	弥生/中世	溝+井戸	磁器+陶器+土師器+須恵器+弥生土器+砥石	弥生中期後半井戸
那珂遺跡群(第36次)	集落	弥生/古墳/中世	土坑+溝+柱穴	須恵器+土師器+瓦質土器+弥生土器	戦国期の遺構
堅粕遺跡(第10次)	集落	古墳/古代	土坑+柱穴	磁器+土師器+須恵器	集落縁辺部

福岡市埋蔵文化財年報
Vol.27
— 平成24(2012)年度版 —

発 行 日　平成26年1月31日

編集・発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印　　刷　株式会社太陽プリント社
福岡市博多区住吉4-4-16
TEL. (092) 431-3456

THE ANNUAL REPORT
OF
THE BURIED CULTURAL RELICS OF FUKUOKA CITY
VOLUME 27

THE BOARDS OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY
DECEMBER 2013
JAPAN